

小精廬日錄

五

大正九年第九月上浣起筆

特別
14
1919
331



不精名目録五

大正九年九月四日記



○閑に乗る南董名文法を讀み且つ抄す、此書法海
古本元觀の著也、其書目七、如く教書の名あり未
刊の抄を云、之凱龜井の下の人、少の奇才あり
教書を序に稱揚す

七修類稿曰、近見金華一友、頃起念於四方、以長
詩文為名、而實干鳴、朱紫兼有、私印一、其文曰、
芙蓉山頂、一片白雲、其自擬法、高如地、友人
南履之嘲曰、此書、每日飛到、府堂上、余讀之

不勝橫眉、乃繼一後曰、此書每頁徑三、北里、頃刻
之間、坎成異觀、近世凡係考生活是也
是景初嘗為人作墓誌、以示朱真、朱曰、甚妙、但只
四字耳、問之、指有文集十卷、下曰、此後當增、不行于
世、四字、是矣、遂添三字、曰、在于家用其意也
昔君績以金玉錦繡求韓熙載、誌其父墓、韓許之
文成、但叙家世封爵生卒年月而已、績甚快、重
緘祈為潤色、韓即削稿、却將原物送回、作者當
如此也、

上田世餘家藏祿南海手臨一軸、自跋曰、予少時

為人書古文、自漢魏名文、至歐蘇韓柳諸家、凡
數百篇、藉而書之、未嘗不捨其書、而不誤一字
也、今也衰矣、法古者猶且多謬誤、况得諸書
乎哉、偶因友人具好紙、以乞書、試書素壁、前後
牀以賜、嗚呼、伏檻長鳴、可嘆而已、阮瑜識、近儒腹
中、不諳古文、一、而而面貌如大王、要以毀辱、加乞業、
使渠曉之、真可愧死、

皇後日、田儒負帳、萬里性狂、間蘇為放言、循性於六
經、古史、頗察矣、毫井先生、寄詩、其、所、著、叢、史、
萬里之輩、評之曰、惜乎、使鄭玄、王爾輩、有此伎

傾今所傳古文尚書堂如是迥乎然海內誤是為
人在九回則唯我獨也文高于揚子雲而其高斑
馬靡及電井乞止亦以為海西奇男子也先生
其勝李鳳書曰帆文字有天來大眼駁我叢史乃
誠有大志的人者氣豪磊磊使人冷畏雪寒中
快哉

秋春水曰池有錢稜菜故鴨鳥着甲叟茶山曰
野有華頰菜故牧牛有文

○九月五日晴初有白雲峰上紅雲如錦之痛飲之
為酒氣多向夕偶之曰是項中者之出者豈

而絕之郵送一了來入在詩三四在歸

江都二三月依之楊柳佳公子青駝馬馳入
杏花西

橫塘喜水生扁舟日容真欲一楊柳青
去年送及及

楊柳其靡蕪綠盡江南路只見烟水
去帆白無數

夜雨過溪陰暮林曉烟白推經去蒼苔
未往無亦

花落千巖上暮山雨如收古溪三百曲曉帶

山中

花飛水上沙柳拂烟中
郭長江君莫行
今朝風雨惡

松下汲清泉石林綠乳
煮粥在溪橋
時自語

驚起鴛鴦鴛鴦美人
蘆花開梅只怕換
昔年不惜羅衣還

斜陽已辭山殘光在
林杪秋天淨無雲
寒見歸鳥

寂寞山中寺行舟
塵世蹤石床雲氣冷

孤坐聽鐘

秋風又秋雨千林
落葉堆只有鹿
麋敲石山人不來

東門秋不掃黃葉
落重山寂寞無人
語山多獨自春

孤舟下古溪水澄
見白石前村黃
樹中有隱士宅

落葉鳴枯林西風
吹水又斜陽已
下山橙留半天赤

西風拂幽階
寒氣吹更雨
月明四無人

潭少夜木

風鳴溪上林、雪埋溪下屋、初寒の地、燭自
起、燒後木

偶遇山中人、杉陰憩、依、水、於、之、又、お、忘、在、
看、白、雲、起、

○船研文に没頭しつゝ、西村真次す、その其政
文能、命、諸、手、船、を、贈、る、亦、他、さ、つ、き、古、の、百、伝
し、を、る、別、後、此、の、古、を、讀、こ、す、能、能、諸、手、船、を、
古、の、能、の、名、を、に、見、ゆ、り、を、能、代、古、船、の、名、を、る、毛、
口、々、と、ま、く、の、楫、を、使、用、す、る、事、を、出、雲、と、朝、野、

の、文、也、と、用、い、は、る、と、古、の、能、の、記、載、の、事、の、
さ、う、能、の、能、の、名、も、此、船、を、現、に、能、の、能、を、
冠、す、る、古、田、車、の、考、證、を、久、持、り、出、雲、と、地、
方、に、初、在、り、古、の、能、を、傳、り、と、さ、る、出、雲、の、名、
源、を、こ、と、古、田、車、の、現、に、出、雲、の、三、保、神、社、の、神、
事、に、目、諸、手、船、の、名、を、考、證、と、さ、る、事、を、一、年、の、或、
る、事、の、記、載、に、之、れ、を、執、行、す、る、時、用、ゆ、る、船、を、一、行、形、
式、の、異、な、り、を、考、證、す、る、式、を、一、行、形、式、と、い、ふ、水、夫、
船、を、載、す、此、の、傳、を、古、の、能、の、名、を、神、の、使、者、と、
す、る、事、を、古、の、能、の、船、を、果、し、て、能、代、の、諸、手、船、

の形式を其儘に傳へ居るや否や如何なるも、今の世
に此形式を以てする目的を想像するも、其の極
ありと云ふ、其の形式の目録代のものとして大いなる異
所あるも、其の形式を以てするものとして、其の
先、角田韓の文通(を)此代の書、此の船を以つ
て行かん、船の氣味も、船の形式、此の船を以つ
て考へ、得るも、西村の如き方々(九月廿日誌)
○西村の詠、船の古代歴史を案するも、始末の船の
浮泛力を具あらん多くの氣を、此のこゝに、其の壯
麗なりと云ふ、此の浮泛は、能本の水泳家の書、人、

踏水訣を兄、ん浮禱の因を載せり、んも、此の
小氣と浮山、日、整、珠、敷の、こゝに、身、体、の
卷き、の、く、こ、ろ、ろ、氣、の、浮、泛、力、を、以、つ、所、に、
古、来、方、と、交、換、あ、る、こゝに、以、て、又、ん、し、つ、つ、也、然
本、の、遊、水、し、と、同、不、二、形、一、く、氣、を、生、出、す、こゝ
を、以、り、又、都、下、の、書、割、家、七、本、を、以、つ、こゝ
に、以、つ、し、こゝに、以、つ、本、の、水、泳、の、書、を、以、つ、こゝ
に、以、つ、水、泳、の、浮、泛、と、以、つ、其、の、書、を、以、つ、
其、の、書、を、以、つ、其、の、書、を、以、つ、可、し、
此、の、踏、水、訣、を、以、つ、一、つ、あ、ら、う、感、を

女の如く、泳の法は、^{「イカ」}舞の泳^{「イカ」}と云ふ一法あり、其
の境く所を極むが姿、水の見ゆるを^{「イカ」}と云ふ如
し、水泳と云ふを^{「イカ」}と云ふて、^{「イカ」}と云ふ其の姿、
^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
藝術を^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
ハ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
女の如く、水泳の^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
要する、然るも、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
得し

北遊水決寶曆八年の刊する肥後能本藩
小幡常吉の著 (同上録)

○腋窩の身体の秘所である、性的狂崇を
刺した、別して腋窩の毛を剃く狂崇を引
きたす、いふ日本人は、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
人殊に、房東人も最も此の性的狂崇が盛んになるといふ、
日本は、腋窩を剃く、且つ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
洋は、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、
目的とする、と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、^{「イカ」}と云ふ、

さういふことあると勿論だが、毛のぬきと陰部の毛を
聯想せしめる為の狂言を刺激する譯がある。日本
婦人の服装をぬくのも開放的の物であるといふべきを
七夜宮をぬくのも法に出来て居るぬい係
し男子のシャツを着ることも祝つても腕を露見
えりまのぬいの人を脱ぎ捨てる用いぬ、(おれ〜い) 女
ハ例におく〜) として電車の吊り革をつつ〜
時〜と名をよ〜と腕宮があつた〜
服の開放的の事、従来坐して居る乗客は覗かるとこ
とに珍〜〜と、婦人の中〜と之れを氣〜としてある

さぬ柄〜と長を用ゆる〜の中〜と今〜
おへの見〜は任〜と置く〜の中〜と性ぬ狂言
〜と危険の事〜支那人の車中〜とある〜
ハ〜の調子をせぬに限る、第一〜
〜とある〜の設計を用ゑ〜とせよお〜
ぬ〜とある〜
お〜とある〜
○日常食する野菜類の内、普通根」と思惟して居る
ものか、あ〜とある、ゆ〜と下〜とある、部令〜と皆根」と
思ひ且の稀〜と居る、例〜ハ大根の葉、葉のぬき等

(日上録)

根と目し現る根を以つて稱して居るが、實は根と云つて
 あるのと多く茎である。大根も茎心ある。地中に在る故を
 以つて一概に根と云ふが當らざる、但し地下茎七形
 より種々の名がある。芋や慈姑の扱ふところを球茎、葛や
 馬鈴薯を塊茎、百合を鱗茎、菊、蓮根も
 別に名を多のの地下茎であるの言ふやむを得ぬ、蓮
 根も根と大根と同じく、根と誤認したる、既して
 根の字を添へて稱して居るのむある、

○左の石印三顆、余の予より由す、共に友人墨本
 欣堂花汁也、余の柴中、春所の刻印を、此の

印、此の印を以て、聊う湯を、蓋す、さるる、是の、遇

石章

款云

杏の象

杏雨印



所の印を以て、許人

名の一事を以て、殊と

夫、遇所、以て、許人

名、一、る、方、ある、こと

此の款、款、以て、さる、如の

と、知る、を得、る、未

不、了、以て、許人、名、印

あり、思、所、者、所、

傲、然、以て、有、六、の、記

日上



款云

余、傲、然、許
 人、數、凡、刻

一、る、方

此、其、一

也、不

○有りの用を得て家蔵の骨董目録を心ふ、有三年
前家蔵を焼くとして高積の骨董多く売却
し散逸存するもの或許七ありし。唯此文房類、剪
茶無類、施書と併せ、別在に存するものをも併
すん心約五万粒あり、此内目録に載せざるもの
約四万五千人、玉石同架の観あるものも、志んく
録して校索の便に供すと云ふ 九月十日記
○但練の榻本法書を志んくと志し、近來披考
三四を得既、架中にあるもの又一帖を得、
岡仲鋤徒常日存するもの頗る長文あり、玉珠三四

を定ふ、但練法書中一帖既漸く可なり、但此意紙
月改換云し修理と要するなり

此の又四ツ切本書籍目録を得たり、巻尾西村
市良本門刊とあり、刊年の刻ありしと、長も寛文
改ありしと、概ありし、前日焼入たり、寛文改本
朝公務目録とせし、珍と云ふし、今四の四ツ切本と南
時海布の洋籍を包羅し、漏れありし、
書史云上此の古者目録無る可なり、元禄刊の
目録を改て除くし、寛文改と稱
親の方也、價各五圓と云ふ、以て之んを徴す

べし

九月十日記

○九月十日の夜。五峯上東京府北沢許渾の丁卯集
 伊勢を出し示す。此本吾根の家名木俣士前の木活
 字を以て排印する不也。余五峯に聴き丁卯の千
 支のあまを許渾の名有ることを知り得たり。此書
 以て雲湯大家弘の序あり。雲湯と木俣の儒臣と
 五峯流の誠人木俣雲湯の弟榮と。と此の大
 家の養子と。維新の隆久に代り節に死すとの
 言ふに此の榮と。ううとあやと。此流流とありと。さ
 らぬ。余又近く得たり。栗本栗里の古画冊を出

十

し示し此人梅海の人と。ふし載る流に逸し
 ハた向し。五峯曰く。あまは此人栗本の養子
 梅海と維新前栗本の流るる。あま栗海の人
 とく事あり。栗里も其人と云ふ

○坊間大槻盤流の吟漸多るる流動を得。此者盤
 流投所の三體流の拾遺を附載す。すべし
 總句の流十首體をわたり佳く話語を附す。一
 道後母の望相名心の吟二十首を。余心詩録
 と當し。今流多小冊と抄す。此冊大正元年。第
 一巻し。七の。流中抄く。時と吟誦。又佳

待を免る毎に抄す、一二年放抛の家寸本蒐集を
如くあり、又時に抄録し、終に一巻成る、此方、弊
語錦囊」と題書す、同形本の竹紙布巾の巾の
とん七位時一冊抄録成る、依る寸本寸本都歎ん
買くと云ふ

九月十三日記

の九月十三日、琳瑯笈と記す、同書と述ぶ、念心の書を
侍り、僅らん、唐本一冊と稱す、之を、此方の抄
と王氏合雅」と云ふ四冊を、序跋共、缺く、王氏
未河人たるを知らず、万葉集と各数條の高浪を
核き上録す、後後身、同書述ぶ、同書為同書

品と又各家の條を附す、各冊約三十子を抄録す、
一種の語録、外に佛説十王經と稱す、其意、
の勝、此方多く地獄の圖を載す、毎のり、
味あり、跋あり、其意、此方此書と稱す也
○創立ある余の社長、其の意、此方此書と稱す也
千強と述す、其意、紀念紙上余の語説と云
曰社、其伊原義光、其意、出原信光、其意、
往々の抄、懐舊語を載す、今も、在社ある、
社、其意、其意、其意、其意、其意、
其意、其意、其意、其意、其意、其意、

海濱作し走りおしる家三十三七枚書きたる
ふ都人とうとうなものをと集めん心余り記隠しある
もの十三四人あり忘印しあるもの者若干あり
ん、四十年の間の歴史をたるとせざ

○方三日前も毎夜最後王氏合雅を讀むを例と
し念心の後ある心其頁を折り翌朝表の束より
これを抄録するを日課とす、毎日二十の即乃至三
十節を録す一冊録成りれば好個語録を得ん
北宮も黙然百家合雅といふ、

○此の早大維抄より臨み、理多しとの報

其中下流の家不動産は堤原次中ちり出地
四千九百五十坪購入し件あり、これを余り別荘
地より谷一ツ隅とする山崎の地は堤と校をえん自
家あり地の價格を思ふのん為め種々の方略を運
らし終る東京市をしてる數十軒の家屋を地
の不動産より心くしあることとせ成切しやう、随て
此地の地價一時に昂騰前年と比し上騰の形勢也
その後の比が買入たるも前年より騰貴を動しこの
も也余りちり地のことをも其のお蔭に浴する
得るもが堤を是れ廿二田五十坪即ち総計十一

第壹千三百九十七のりしを以てしるよしを其の
のち地は比しんが堤の地一二畝下等の地より、余の
地附近に現在を以ては三十五畝の地ありしこと、地
に多く家屋の経営ありしは、電車を以てせば
地價を更なる一層日即騰貴し、余の地を以て
と家宅のふたりの別荘地三千坪ある耳、持欠
るる哉

○野球の仕合と今、ひと馬鹿なるものごとく
先以早稲田のグラウンドに市俄古運を以てして
行し、総収入五番田以上、市軍の費用と共し

剩す所二番田、さうくらの利益也、此の仕合の入場
券と持券五田一券三田、是れも人も多しを之んを
在り、時勢の变化を視て、早大と此の利益金
を以て運動場の自園に三万圓の鐵筋コンクリー
トの場を(うち七尺五寸)此の場を以て、
其の地味は、其の経費を以て、約千三百圓は
約六千圓を以て、スタンドを以て設計せし
てあり、その全部のスタンドを以て、八千圓を
是れ、或る部分の地を以て、其の地味は、
り、早大の地を以て、其の地味は、

地形からいへば早大とグラウンディングは母独占の場
あり之れは設備を為すとある南の経路と云ふことの
也

九月十日百録

○此の維持費多し臨海子松平伯事ある其の
況は也才外者角の諸利ある大寺敷き延て
智燈階級と董深し中唯武名の嗣子岩太夫
物所多の粗執と教く可き程りし子に可し伯
事も皆其の岩太の執列する勅諭も是公の
此の病り状態を治ししうらんかじまの概
もゆ子中か家のいん入るるある切らんも亦

たあ何ともしきうくと云ふんも露むい海りこ一程
毒化病と同じ 日 上

○九月十日西崎青洲の巻中荒干と崎の





是文人の位牌を存するの意耳 古海と木戸
松菊侯の記意也

支那の大骨董と泰山也余前告既言ふ而し水滸は
又一の風味ある骨董と謂ふ可也而も水滸は
泰山^{（俗）}我勢力圍^{（俗）}山東に在り凡そ四家の骨董
ハ如北七の増ふ可し此等古色の潤澤なるは風味ある

七のを包むる山東^{（俗）}支那骨董の府と謂ふ可し
傳言を後述毎に其の元代の説なるに物類を現代
を自言すに甚に相似ざるを見し^{（俗）}支那の社会も改次七回民も道德も^{（俗）}風習も水滸盜
賊剽掠の時と^{（俗）}或人と異する^{（俗）}此の一新傳
言の珍るるも其の著者文辭の珍るるも又も
六此此に於ても甚珍也水滸傳言も^{（俗）}偽托の七説を
九も水滸の地も^{（俗）}偽托の^{（俗）}水滸中一二の人物即ち
宋江の如きも^{（俗）}実在の人物も^{（俗）}其の盜賊の行為も
六^{（俗）}實事も^{（俗）}屬す也^{（俗）}水滸の地も^{（俗）}此の^{（俗）}萬^{（俗）}名^{（俗）}の

姑々説を據るを益て其の統味を深めし其地を念て其名
 のよのよ〜と名づる **不備** 山東の名所荒し泰山を除く
 恐らく何人も先づ指を之れに屈するも **異論** 無ん而も
 地生東に傳 **我** 其地を採る 其地を採る
 七の筆を遺域とて **遺** 遺棄する泰山論を **日本人** 寄
 七十の **登** 嶽を **試** 又 **歴** を **披** 摭し **濟南**
 歴山下の天鐘道人の **水滸** 採討を敢てして **項日** の **同** 報
 誌上之れを掲出する **是** 人 **老** 其 **福** 考を傳ふる **古** の **記**
 して **余** と **深** く **道** 人 **に** **謝** し **又** **田** ち **此** **記** **を** **と** **覆** **讀** **し**
 たり、今特に梁山泊の現状と對する **一** 項の内必要の部分

を採りし以て供てんとす

傳に有名なる梁山泊と山東省西南黃河を流るる
壽 張縣下にあり **鄒** 城を距る南の方を七十支里
濟 寧より大運河堤の道路を北向し **新** 州河鎮
 より西北に向ふの行程を取れば **二** 百 **一** 十里を達する **嘉**
 祥縣城鉅野の界とす **二** 百 **一** 十里乃至 **四** 百里程
 あり、余は梁山に關する先人の記を於て **僅** かに
 法人曹玉珂の **過** 梁山記あるを知りて **又** 其 **記** 凡
 由んハ、梁山に樓然なる **一** 阜 **立** の **又** 嘗て **名** する **也** **此** **山**
 ハ **峯** 高 **く** **聲** 深 **く** **孟** 門 **劍** 閣 **の** **色** **ぞ** **一** **天** **下** **の** **陰**

つぐしと給てしるるありし三の小山を
皆に聯りて山下村居比密長人之灌禾のめり一溪
一水由りて得可くする其陰を何かの恃むべきありし
之を怪み由て父老に問ひて曰く古に黄河山を廻
り濁流を流る山を浸漚す所謂枕花潭とて洵
ハ山之固み之を在け以て梁山泊と号する其陰を
山と名するしありしと

道人の定地を認り此の記と為るがごとく同じくして
道破と云ふ

此記の由りて梁山を一阜丘のみと謂ふるも亦さうも

と大平野の中を麓ありて得りし梁山を一千尺の
高さありしと云ふも其氣象雄大なりと若し南平の地
ありしとせば山と名を候て難攻不抜の要
寨なるを察するべし其山も全部を石灰とて成る南
圍四五十支ありしと離れて鳳凰山西北方に踞立
し其の要害を有す現今此二山を昔に山林兼の部居
を圍むる山を中として牆壁を造りて其の長を二丈
城廓を有す牆壁を有す二丈由りて梁山の者
ハ凡五十里鳳凰山の者ハ凡六十里と云ふ而して
梁山城寨内の部居の多きを其部居の名を

けあひも別名(一)云々大木村為三十五六山林を廻
りて(一)續し北全部を梁山を中心として防禦を
以て固む十六の城つと設けし出入を控ふる、而して
北梁山の山寨の内、石住も任民の其数三番を數
ふ、鳳凰山寨又都府七八數千人の任民あり、山東の二
年初夏より土匪の横行あり、梁山鳳凰二寨其據
る所とす、一うが其剿滅以後馬隊及核其銃
協を有する、歩兵一營あり、梁山に駐紮警備の任
にあり、石住より、梁山の前店集と名付し、獨山集寨
あり、獨山特立の役、其山林麓に杏梨の大果樹あり

しとる時思ふ、し梁山及び其傍の諸山は香木あり、
以て檀藿の利牧畜の益あり、而して人口此の如く稠密な
れば任民の稼穡の山を開き石を耕し或は石を
焼て石灰を製し或は石材を切り出し遠く之を販賣
す、獨孤山の如く古来未だ荒らざる山あり、七八人
山形一変し、梁山の如く、其山林麓に石灰竈連続し
耕石の音憂あり、一山あり、黒河山脚を望み、而して
一山あり、其山あり、現るる山あり、一山あり、一山あり、
玉珂の記あり、
道人の更なる進ん、碑を記し、
道人の更なる進ん、碑を記し、

梁山の最高峰に石牆を以て圍ゆる十餘畝の地あり
お俗呼んで米江寨と稱す寨の南崖を虎頭崖
と稱す壁立て數十仞攀登すべし其崖の中あり
佛廟あり今や頽廢の一腐の存するも其往年の
制規を觀みしし余の其殘存する碑碣を探し
僅に一明碑の半に止る埋没せるものを掘り
しめ之を拓して虎頭崖の於ける唯一の遺蹟
と爲り其の文あり

壽張市の東南七十里に力梁ありその山元碑曲後
約四五十里下に即ち湖波江漸浩洋約八百餘里に

故豪士其勢に據て衆を令する威を震ひ名を流都
難し敢て與に抗する者無かりし今も其遺蹟
あり其山の前に水の渚と虎頭崖とあり是に
當時登船の所なりと二碑あり至四年方の重修
に關する其の記あり其碑に載る二廟浸廢する
もの記あり

即ち此の北碑記の書かぬ時代の嘉靖二十三年頃
梁山の一望にあり其水に梁山の脚を匯水
の浸潤するあり

道人の磨崖の待を捨し順沈の年と改に水

るべきことを証し又宋江の東路を荒擽したる宋の宣和三年より四年後の宣和七年の梁山北西の逃捨肉産の場所をもと（寒烟岑并水湾探）宋の官の方氏の理由をもとを証し他に薩天錫の宋の北の地を討つてと証し詩を挙げて同じことを立證しつゝ而して何れも此の方氏を考へてつゝとつて黄河の水路の要（巻）の地をもとを考へる（大正九年九月念日録）○次日本排洲の一日（法）とて日記抄録を續けたる一冊成るにわけたる家合雅とて、初の王氏合雅を漢の鼻を感して念の節を録す、十枚枚：涉るる路の程を

おしと盡く、而して尚ほ冊子の路のをも多く存す、終る往年抄の編りて繁白馬後を録し置きたる者を取出し其内取捨するべきもの多し、故に即ち相す、ぬちとある家支那上代より明の及ぶ而して邦人の説に及ぶ、劍掃某根澤の類取る所あり、くみとあるも、他者の涉穢も六度あり、お録一也、るに及ぶすとも、涉穢の類、一旦取捨し、り、多年採録の粹を抜き、此種の編送、平再録のさると涉穢の日子を要する、所也、余ハ少く支那の文字に於て最も及び難しと感し、つゝ其ハ

海論を聴かす一時的に三時中に到り已む、使を遣はさく
「あふん」とも、日曜を後令成り司令者等所を以て海光
づれをうし初まふ、使に

使より日曜とその日陰歴ある日曜に日曜の休務
と如しとのを休んじ、維新の初年太陰暦を廢し
て太陽暦採用とありしにそのを休んじあるの初年
大久保の木戸も尚主かありに、之れを以て行し、其の
去義の政府の令を辨、うすもを指すのひある、太陰
暦に於てとす、日曜、閏月を生じて二月は二日のあ
る歳に於てのみ、令并上る、而してある、改め

此のむす、保しきう、而してあつた、たるき、自ら
かを耶蘇教具いとす、其の政教を以て是やと、さうこそ
耶蘇教カレシトと云を懸い、自分、耶蘇教行
者だと云ふ、始終と受け、其の理を自分、うのり、
お四人と三人の、立好のひあつた、保し、自分、
教の、あつた、之、く、立好の、
その、も、保し、く、
ハバ、イ、ブル、位、を、
指つた、自分、を、
に、ハ、イ、ブル、が、あつた、と、云ふ、を、

おが信ありし何う云いせむいと彼等とつとめえみる
扱はと後く

自分らも大政治家の地位を十三年限としこのといふ
お評うとそを修めしれふ侯の

この政府の留めむとまう其に大政を起すのまう
けはスライタ 等う策しれこといある、ツオウ十年

以後の三年、利息、ある勅定ひある、お四人七之れを
見しる、利巧をまう、方とそを存められ、まう、一ツ
徳ありんれのとこれの上頭、穴の穿つとある、ことい
えん、まのまの、まう、薄れ、ニコヨリと通し、或收む

いふ先例を起し用いたまのいあるが外人をこえをえしよ
い思ひつと、比、世界、度う、とそ、ま、未、れ、紙、幣、の、穴、を
穴、穿、つ、れ、ま、の、他、の、無、い、と、ま、ふ、れ、と、笑、い、る

海と物なる察の、こと、小、轉、し、れ、あ、の、御、不、由、の、物、な
察、う、つ、ま、い、ん、錫、崎、閑、坐、と、其、紙、幣、ひ、あ、つ、れ、侯、は
此、お、が、察、を、い、め、る、ま、あ、い、ま、い、い、ま、い、侍、ら、ま、あ
の、使、子、の、身、氣、う、鼻、を、撲、つ、と、閑、坐、を、潔、癖
ひ、あ、つ、ま、い、ん、を、忘、あ、い、と、甚、し、く、な、後、ま、い
閑、坐、も、閑、く、化、せ、い、ん、と、使、子、は、其、の、後、手、を、洗、ふ
に、手、桶、の、手、を、穴、に、こ、ん、が、平、氣、ひ、居、る、様、目、さ、う、り、れ

此頃徳義の月俸うける同きし政府と歎嘆固難
て時王月俸うけし事ありしこと古ありしあり
歎嘆有る三回ハゆきし由利分心の狂待ハハ月俸
三月紅せんこうと云ふ事あり即ち美たひあり
談と閑波の王道論を稱する候云

閑波と古賀教書とを共謀して大の王陽の位ありあ
つた閑波と自分の欲出に王道論を美しし閑波
自ら平先と鍋氏の義と云ふ又かき綿時と
つげ屋舎と云ふは閑波をついて鍋氏に即候
をすくえんとし(也)既命のものを領内うけんと

禁しは女即ちわが珍料地を芝石相撲の如
きと林ありし領あり出ると酒名も耽りしこと
あると云ふを四訓し閑波は自分の別荘を開放し
公庶の用を供し自ら馬を養ふ領内を巡りし
親しく百姓に接しん事地を窮め而して後郡村
み平治のものを替へし閑波と終に地主に向
つて五町歩以上の土地と十年分ハ心料を取ら莫
んと令し地主も十年丈うはにじりし事抱
ことその後つたが十年後つたと云ふ十年と令
し三が目の延長御地新が来れ閑波を理

論じらるるも、其論は、王道論を行つた、此點を以て、
尤も偉い、如く、節一と稱するもの、を以て、
し、兵者、其の死を利するもの、を稱する、
幕府も、情を以て、質、情を、
と論じらるる

侯も、此に、あきう、に、
後、日本、の、美、瓜、を、視、
後、日本、の、美、瓜、を、視、

及、仁、の、亂、を、あ、ん、を、殺、伐、
宣、義、の、
國、も、
下

侯、の、中、の、古、智、
を、
お、中、の、人、格、
と、
人、と、
こ、
う、
大、
球

古今武藝の無い國はとて敬るべきであるが全
体他より迫害や殺戮を言ひの結果として其國
も同じく殺伐性を及ぼすのである甚くは其
琉球と異るべきところの故である
と終る終るマルリスの論を極める

マルリス一輩の後の理想の是れを今試験中
である露露の如き大國を多るさとし試験中
である、然るをどうしてか、
と事として上げれば此の理想を行はんと
殺戮の此のまゝ我々随分するところか、
と

一七七仁政と云ひぬる

と説く、汝も露も子夷難の流し出れ、後
露もあつても、美人の裸体おどろき
鼻を感し、ちと、土陸し、常和とある
列する、款約を言ひ、昨日のあつて、裸体
態中、及ん、あつた、日本の上下
を、戦慄し、英の大使を、此、
と、評して、露、
本國、危、
出、此、

と云ふに

○坊内道延、此年迄も、熱海に去りて、物心、觸るゝ
既ち此のし、其れに、言をいん、言、歌、好、着、年、去、る、見
と、前、書、に、ぬ、の、豆、き、た、る、が、あ、る、時、寸、作、を、寄、を、詠、件
を、此、の、丹、子、に、寄、し、て、い、ふ、日、え、ら、ば、築、中、の、珠、と、い、ふ、し
と、頼、み、互、々、し、れ、な、ふ、漸、く、出、来、て、手、に、入、つ、と、得、字
此、中、に、熱、海、の、名、扱、え、頼、ま、ん、と、い、ふ、く、心、を、ん、な、る、が
甚、達、目、と、物、も、唱、ひ、た、り、又、熱、海、海、つ、あ、る、後、の
熱、海、の、栄、え、を、極、し、る、者、以、て、あ、り、此、の、既、好、の、題
署、を、手、紙、し、て、頼、ま、さ、く、九、集、と、あ、り、其、者、五、首、の

十
集

和歌を録し、順序に代へ、其れ、其れ、物、心、屋、内、の、珠
と、云、ふ、に、し

九月廿二日録

○西村休夢が、早稲田の、園、者、歌、と、漁、つ、て、あ、る、と、多、方
由、に、古、物、を、見、集、め、て、我、が、七、巻、す、る、の、を、今、も、先、生、の
お、蔭、に、あ、る、。此、の、も、又、ハ、コ、の、歴、史、を、考、へ、て、洋、書、を、圖、書
館、の、書、庫、に、見、え、し、其、者、首、を、見、る、と、先、生、の、後、書、に
い、押、し、と、あ、り、れ、先、生、の、手、紙、に、い、ふ、こ、と、い、ふ、切、れ、と、云
ふ、自、合、の、云、ふ、と、云、ふ、あ、ん、と、而、も、多、く、古、物、に、各、人、種、の、物
名、の、録、す、る、書、好、め、や、喫、飲、の、方、法、や、用、具、ら、の、細、目、を
書、い、て、あ、る、人、数、を、あ、の、と、い、ふ、と、い、く、と、い、ふ、先、生、の、手、紙、

たう、こんな就めをすることを想ひ起り、早稲田大学の
前身時代の講義を大講義の時、改題を考へた。此の講義的
改題は、集る条件は、やうやく、その採り改題を考へ
を採り、その改題を聴くことを禁じ、改題を考へた
時自分が改題を考へた。大講義に出さずして見ると
壇の隅に坐す者、老々々監視して居る。改題は
出来ず、多々早稲田で演題として、其時後、其の
此の講義の歴史を考へた。傍に居る。傍に居る。傍に居る。
の事、其の歴史を考へた。傍に居る。傍に居る。傍に居る。
の講義を考へた。傍に居る。傍に居る。傍に居る。

記念物がある。その傍に、種村宗一が居る。種村の
先生の演説の傍に、種村宗一が居る。種村の
冒険の傍に、種村宗一が居る。種村の
人類の傍に、種村宗一が居る。種村の
茶の傍に、種村宗一が居る。種村の
と、種村宗一が居る。種村の

九月廿三日記

の満所の寸本を納めたる。垂るの書函を紙を床
脇の架上に懸列す。西側に三十の書函を積重ね、西
面壁際、大小錯綜の箱三十を置く。函数九十三

常休十教の函を容す。餘地有。昔し松浦武四郎
一疊の板の寸首を修す。余と寸本千種のをとて、一疊
の板の庫を作え歟。細小の本を窺九等箱二十餘
幅と多く二寸と元以等とあり。寸と元以等。尤七小
るもの幅寸餘あり二寸四五分。~~然~~玩具の
かし、为め一嘆す。
九月廿三日記

○玩具倉伊勢辰(廣瀬菊雄君:辰也)が道楽
も合に此の地を錦街問屋講と題す。一巻を公
刊し、木彫り精製のものあり。石井研堂と号す
漸の輯め、高標を合し、考證を附したるの心、
世

信の秘宝とも矢張りとなるべし。考ひある。今この書
を漁り一冊贈ひこふ。さうして書後る者也(九
月廿三日記)

○仙居の狂畫。此の書は方面の流行しとある。其
の書集するものがある。六冊あり。一冊は、
のりある。此人の畫と洒脱び一程の味がある。矢張白
隠りの板か。何れも帯ひて居る。底に、あし
其の板の裏のあし。受けた。あし。あし。あし。あし。あし。
木田通保の畫。是と帯し。和紙木彫仙居の
書畫。目と野々輪。臨し。一冊と贈る。あし。あし。

況廿五年の刊をいひ、今を待たず仙居の物語を
早く三十数年前のあつたことと云ふ。是うし此書に
録る元いけきのそのは、若居を授するに近所を
：授けたりしにそのとあること、都つちの吾輩の
いふに道記の事

の上

○九月廿五日早朝又未邦武面を大崎のそを訪ふ日
停東坊出のしえ今のをとるのこに、が日二十年
う前：此にその時：此にその所、木七よ
くたり即書も増の葉あつたその家の家つち
く五流き、今つちとを、と焼くし、ある博士

の碑文の好く二三修訂を要する事あり加せしむ
ん為のさうあり即ち、此書を施し、先ん
どう、その果を例のこゝ種々の海も、其方の
床に七十と歎く、其方の書幅を掲げ、福を乞
ひ、いん、初ま、久米の先を、あり十二三
位の時大改に倣ふ、其方の書幅を掲げ、福を乞
時、其と文あり、此待福を、其先を、いん
者、いん、その久米の花七、いん、酒に、いん
史記を、いん、その先を、其酒を、いん
と云ふ、

自分せんあかきうき(ハ)い可成ニ友人ニ托して猶子
とまふに日あかきうきやと終ひ片がむぬに終せは合々
夫人の表に出さうと決り

余と岩倉公と岩倉公府の前後の勤とさうをさう目と
注キいあとなるとの関係うりも同の事ありあつて世に
と自分と岩倉公の如きもゆきと任用と増えさうと
さうあつてあかきうきやと終ひ片がむぬに終せは合々
と直大の傳と定めぬ直大の洋の事時自今も地
はさういさういさうに在府とあかきうきやと終ひ片が
府と副後の人さういさういさうに在府とあかきうきやと終ひ片が

の事いさうと心腹いさう木戸も久松岩倉の如く副後
といどく腹いさうとゆきと終ひ片がむぬに終せは合々
病いさうと終ひ片がむぬに終せは合々
子の直大を洋行せしめんとことを兼し自分も傳
てせに行く物いさうの命あつたう、其後副後及
岩倉と直大の如き、常々思ふ事ありさうと終ひ片が
あかきうきやと終ひ片がむぬに終せは合々
おとさういさうの大使とて洋の事時自今も地
り先き自分と傳しと直大に回付さうと終ひ片が
さう終ひ片がむぬに終せは合々

果ありとすも信しきもの也然るに其後亦た
強を同行せよとて大使附の某官の名義とせしむ
ぬ辭し其物を終は其行に加ふることをせしむ也
又又開使に就て語る、あの人とあるも揮毫の人の同
僚を今途中に天子に聞かすことあると望むし禮
を修めたる^{三條}岩倉を無禮の態にむかひたつたよ
か開使の前にと其の^御態に倣はざるを得無つた開
使の謹言も此に^御あつた^御望む^御い^御、天子の
御意をいふてあるうらむ初めを^御氣を^御位に^御あつ
たか、^御謁見して^御見ると^御ひとく^御天子の^御お氣を^御入つた

今と久米翁に向つて大隈方を開使と何とぞ似ぬ
居る候と思つる其の長幹を^御其流を^御其の
其のな^御并る^御不^御皆似^御と^御あ^御の^御く^御ら^御似
て居る其の似せる^御不^御候と開使の^御な^御程氣を
ら^御開使の^御程氣を^御い^御と^御よく^御怒^御る^御ことと^御あ^御い^御あ
つた衣の^御もの^御皆^御お^御飯^御し^御と^御大隈^御と^御こ^御ん^御ら
大隈と大のハイカラで此に^御と^御開使と^御同^御し^御と^御さ
れ^御と^御是^御ん^御時^御勢^御の^御同^御じ^御と^御さ^御る^御と^御望^御す^御と
云^御ん^御歎

維新の^御め^御を^御依^御が^御る^御や^御人^御物^御と^御高^御を^御云^御つた

宗貞の如き又四子のみ育と依賢に托して位するの
況十年の頃より宗貞の子弟と依賢の孫とを
七の也(と)と記す。

○先の獲字栗里の青西枕：つき栗里の為人也卿
関するのを神心に見えん、左の如くあるなり

依木吞字士遷号栗里逸士本姓海氏
有故改栗太氏上毛人为大橋陶庵友

雪之高山仲繩遺墨を上梓し仲繩自筆の江戸
日記を世に公けり、高橋陶庵の奇蹟の一詩を得
生涯如太古心境入仙群、昔名跡の志清

秀倦愛焚印名門あり、中貴林瑞雲、高
節直純傳、宗貞有此人

○九月廿号神田の南の住居に子まさなる古物
屋連念の書と判り、易と格入べきものを
お、僅二二三を辨り、其一を、新見と云ふ、
と往年ある格好の存と見しことあるも其後
と見ず、二冊あり、昔志紙格好、初冊を姓の
名寄り、右冊ハ新見、後の月見と古名と寄し、
を入、右冊ハ万八壺の薄名を列巻なり、文政二
年の版也、右冊ハ花柳、頃と記す所

聊之滋味を成りて睡之筈中より、此方價二
田のりかへ也
九月廿二日

午時後再び南の但馬郡を訪りて又過る時を
尋らば二時を越して得る家僅らぬ四五往くる
きさや而して………
あま

宮詞百首 一冊

淡路の後為山孝康王選に徴るる我
朝の宮棟りるを詠したるものこゝ各
細注あり、此方今を稀観の考こゝ

知命記 一冊

中林外洞自著の地草を刻したるもの也
文政行成天保梓之 equal 物販と巻
尾とあり、全割梓とせ、容易に手
入りのこゝき考こゝ

乙寺綴記 一冊

丹後書局者中の中りこ、此寺余の心
にあつをわくを此の一冊おもひ
後と為る伊久の草をそとくわ三
年以の女のこ、今と丹後を極見

昔々此一冊價五圓也

此の北溪の画一巻金龍山法華寺の繪圖一
折取し紙と墨の二巻とせん。雷門の在りし
之を現在と同一ものありて其也

日之末前よりお伏利る。吉田の一千二巻を酒や成
の諸巻を刪去するを可とすと申來る。同感也物
々墓誌に勸する程のことなれども偶々於人を

昨日は首途より交草平へは急行

所一不堪怙怙其節は未だ法華の

吉田君と墓表を猶熟考し交北

海道跋涉の事情は河より下るに深

き事なれど文に節略を加へ又一千

二百萬言酒中成り濃語は只一千二百

萬言の數を點醒し置なきに記事不
書ふんは本意に有之條彼文を訂正
酒半成の事を略し之を改訂し其
別紙新訂の改訂を條記し之を訂正
於原稿と照合し其甚考りて之を以
先の用向計ありて可成

九月廿五日 三木邦武

市島老甚
付史

誤解せしあると酒半成の三字に於て
○那須回送碑考、明治十一年十月下旬星野の人
地山三田稱平の編著出版に係り、考決註家と共
照しよく要を得ず、試みて「評替被賜」の條を
見よん左の如し

國造ノ命ヲ賜テ云神林氏曰評八郡也日本紀ニ
背靜アリ續紀ニ評督アリ曰高靜アリ又梁
史新羅傳其邑在內曰咏評在外曰邑勒猶言郡
縣諸家讀之郡皆ト為スモノ末夕悉サハ
ル也

とあるハ正シ、并白鳳頃迄郡と考ヘと考ヘハ評
と考ヘテ大和の法全別院の鏡鑑もこれ有る余
の向養宮院今之カワ河内の年々阿蘇も亦これ
あり、評之行政區劃有ること正也正也正也、此の西
邊碑あり、今之得ること正也、架中ニ存するは是也

○昨夜夜後購ひ得たる竹洞の知命記を讀み、此書
目數ニ関する、梁が晩年の隨筆、梁が其の死を
窺ふ處し、人ハ梁を畫家として知んば、梁の
のその死を知るとの難い事、梁は其の家に生
れたるにこそ是語あり又梁子とも嘗て心たること知
余記の自叙ありと知ると、彼の著者たる皆偽
名交り○平易の文なるも何事ぞ、就ても後所
甚に讀見あり、且つ口實處と適切とて穩健な
る所、論する漢學者の速く及んざる所と云
余の策中に水洞の畫あるに關する著者ニあり、而も

北の紀命記と尤七巻の性格の同見候と後七の
とあり

九月廿六日記

○寸珍本と十集^部めし見し、さし寸珍本を何れの目的に
えん^とと案ずるに、誰れも唯々出書せぬ、さし油伝に
あるもの、と無難に云ふに、さし、さし、さし、
無い、推考の者、^{寸珍}年められたるもの、さし、判、
あり、左の如く、分類すること、出来、扱、
あり

一 推考草便

何れ七巻のつく所謂、油伝と云
ふの、さし、但し、推考草便の便利の、さし、油

法ひ、さし、坐、さし、さし、さし、場所
多く、寒、さし、便利、さし、推考草便の、さし、
さし、例、旅行記、さし、詩人、さし、始終、
用、の、さし、教、さし、俳人、さし、俳、
歌人、さし、言、さし、の、さし、さし、さし、
さし、さし、寸本、さし、さし、さし、便、
さし、さし、寸珍、さし、さし、
さし、便、さし、さし、さし、又、
さし、さし、さし、さし、さし、
さし、さし、さし、さし、さし、
さし、さし、さし、さし、さし、

支那の及ぶものひやくハ田四者五種の類からる。又法
曲本が百番二万番七寸本の出来て居るもの概
帯便ひやくハ

二 谷器のなるる為 自然なるるるを得ぬ
のがある。例へば佛像の胎内を納める径の大き
ハ概しかるるを得ぬ。西蔵の如き三分計
りの者も絹糸を捲いて幾十とす。納めしむ
鶏とてんうたせなるものもある。法華經も
胎内任ると出来たものを概しとす。その概
りもまた、大般泥洹の代表が保目錄を豆帳

二作つて佛像の胎内を納める例もある。自分の工
シクシヨンの中心を康迦の年節の如きもの
法隆寺の百番塔に納めある。寶篋珠の
四種の多羅尼七階の如きものもある。ことと
海に七組の居るものもある。又紙入用ハエセ工
用として出来たものがいくともある。若し紙
入ハ割念ふ大きいけいもまたりて其内に入る
たをかりとす。婦人の用紙
はハさいの如きもの出来し居る。此の如き紙
水セ工入の如き、これらを給も定めてその教訓

の割するものや用文書や化粧其他女禮の割するもの
をいふなり。

三 紙類する必要

の紙はかく作るものもある
春書に用ひる紙の多くあるのを紙入やハコセ工
に入らざる紙もあるが、これを容れ紙がよい
とて、目を憚る上にもある。支那の科挙
用紙澤山各科の寸本が出来ておるが、これ
人知らず繕入して試験場に入るは、由々
見こむものもある。此部類のものも、
う、軍用紙、紙、青紙や戦時時代敵

の境と踏くるは、隠し持ちたる書簡例、ハ
の論者も、その未だ此部類のものも、
の類と認めざるものもある

四 物その自身小なる為

印謄と此の類の通例
ひあつて、印の多くハ寸もえりぬ
ものもある、そのと、不釣合ふ大本の捺
する例もあるが、実と寸本の捺して、
り且つ折合ふものもある。印謄と寸本
の、むらも、むらも、又儒者心と孝経佛
むらも心経の如き、紙教のあり、

寸本の心はせりあひ、心りあひと云ふも
幼る枚数の少るもの寸本は寸本の方より
折念ふ要らざる、高麗施本を刻ししもの
此の二種がいくらかある

五 小なるもの取念いせりぬ ちよと離本と唱ふ
の燈心の豆本、薄もの人形の持つちよとあるも
かちよとを得ぬ、涼衣物後伊勢物後注目
とちよと豆本のちよと人形と折念ハせれ玩具
とちよとちよとちよと、懸止放む精刻のもの此内
にある、同じ意味は小兒用の繪をちよとちよと

いもの、あつちよとちよとの、これと誤る主体
の大きさと釣念を保つもの、またちよと、又此
の煎茶ちよとを無闇にえし、ちよと茶器一
切ちよとちよと、玩具のこととちよとちよと、或んと
實用ちよとちよと、ぬのを珍とする、随つてちよと、翻ハ
へき古画帖や書冊も其の釣念、ちよとちよとちよと
得ぬ、コシナ目釣ちよとちよと、ちよとちよとちよと
ちよと、ちよとちよと、出来てある、所謂、提い監入と
稱する、卷子帖や冊子ちよと、活葉茶風帖、ちよと
ちよとちよと、取念りすめぬ、ちよとちよとちよと、

カのを好む、随うとヤセのものを製造化する

六 技巧ニより来りての 銅版術ニ好むを聞けり

其道の者が好む心ニより、且ごとく清や其能を出来
る限りニハヤミ印刷し、毒眼鏡を削りて、技巧を術
つれこととありてあり、木版術とて木精刻を術と
し、肉眼ニ見えぬもの字を彫つて、其細字
自慢心ニ微細の字と考いれりしを之を冊子ニ
す、製本を屋七装釘の伎倆を示すこと之を
巧みニ綴じて其の器を厭ひぬと考ふこと之を
技巧を弄するニ上ニより来りてのむあり、拾ふ杯ニ

赤聖賦全文を細考り、時々、米粒の俵像を彫つ
たり、そのものと同じ海を汲むもの、一種の事
家の款印する所あり、西洋の堅三分隔二分
程の豆本、バウケルや字者を出版し、毒眼鏡を削
りてのあり、スコットランドのフライスと云ふ者
根うす木出板を以て名高く、その目錄も
見ると、眼鏡付の豆本あり、あるは、皆技巧
本位に実用をなす、此のなかのありありあり

七 小字とて、味とす、上ニより来りてのハ刻金
に多くあり、其本の可なり、ハルセントとて此の類

味う作るといふてせよとて、田能村作のや
館柳漢や松浦武田印のこときと階か
味うこれこころ其の残しと出敗物の品
又と容物と判すること出未る、古語に大うと
粗うんこころと粗うんこころと粗うんこころと
大形、心堂と作る本ハ無執味も云いぬ、小形
と云ふて寸本も無執味も云いぬ、小形
ものこころ氣の利い味、物と云うて小形
無けんか、ぬものある、詩本のこときと概
小本の方が目氣が利いてみる、花漢とて美人

漢とて倚讀と輯のれ、文人の戯あん、編
一に雅文とむの類も多し、短冊が大本の心
と容物味を完する、粗うものこころもある、
例ハ瓶史のこときものこころ誰ん、あくる豆本
ハあつてあつてい風、こころ改之ん、豆
本と云うてあつて多分、煎茶味、こころあつて
けん、豆本と松浦のものもある、世間と種々
の執味家、あつてあつて、何んか、故
七や、名を集めて味とする人があつて、松浦、
のあつて一、器、あつてあつて、こころあつて

云ふことより出来らるゝ亦其滋味と一種物故に滋味
とも云ひ得べ心こ其こ人のの七ぬことを倭人の老ることを
重し未化せしことを滋味とするものこ大なる
を滋味とするの五指と及抗的の二さとやるを強
味とするもの七ある〇大なる飽きたもの七
細煮も六珠ひあるものを滋味とするもの七
あるもの決しそ不易儀をみるい、ふるを俗に可受
やさしいを云ふ味の附きもの七、ふる自身に
一種の滋味のあると紫説を保たぬ

大体以上のこといあるが、こゝは寸珠を板行入大なる關係

をある一事の附記と要する、そのを印刷術の進歩
に此種の四者二乾印書ある事がある、乃ち銅版術が
開けしころ、~~常~~縮本術の容易なるものあり、一時銅
版の縮本に感入る出版せん比、その次の十年経て十三
四年頃まで、出原の考に版を以てその文のあり、
その吟香を支那へ輸出せしむる、殊に科書の試験
に中心とするに感入る銅版を用ひ、そのころ後石印
の術が行へて、銅版を取つて代り、之れ又縮本を以て
一層便利のある所より寸本の出版を多く見ることをな
す、此の寸本ハ寸本の考史上逸す、その考の

物味を口~~の~~ぬの印人多く名を列す、刻~~日~~七
 あり、刻~~者~~の名を捨すん~~が~~敬高~~山内~~春卿より
 余前日敬高の印を捨し、一~~の~~印語を得、未~~に~~敬
 高の印人~~ら~~を知り得さう~~か~~、茲に~~於~~~~て~~得~~る~~其の
 氏名と、春秋猶~~常~~印人~~ら~~を知り得さう~~か~~、或
 人~~と~~同~~的~~に~~今~~津~~の~~判~~を~~、~~功~~教~~丁~~の~~印~~視~~を~~得~~る~~
 事~~の~~、印~~ち~~左~~の~~取~~を~~と~~示~~ (九月~~の~~記)
 〇と~~ふ~~九月~~の~~晦~~の~~日~~を~~、~~吾~~の~~月~~也~~は~~、~~此~~
 を~~印~~と~~共~~し~~の~~、~~形~~、~~一~~、~~骨~~、~~董~~、~~高~~、~~紅~~、~~砥~~、~~石~~
 リ~~と~~、~~舟~~、~~形~~、~~の~~、~~書~~、~~鎮~~、~~を~~、~~お~~、~~ち~~、~~来~~、~~る~~、~~也~~、~~也~~、~~来~~、~~る~~、~~董~~

取次 柳屋

全 吾 八

全 俳 畫 堂

大阪市東區平野町三丁目

大阪市東區平野町三丁目

東京市神田區一ツ橋通町七

論印絶句に海忠介泥印を論ずる有日丸泥同故玉。
 又有日印文奇古氏篋鬼。廿旦旬笈印を脱日文頁玉

殊味とて曰く、取入るる名を列す、刻日七枚
 あり、刻者の名を捨すんが敬高、山内春卿とて、前
 余前日敬高の印を捨し、一不印語を得、未だ敬
 高の印入るるを知り得ざりしが、茲に於て、清く其の
 氏名と、春秋猶帝志印人たることを知り得たり、或
 んと、同的と今津八朔とて、功叙丁の印規を賜り
 する、印ち左の如しと云ふ (九月廿九日記)
 〇とて、九月の晦の如しとて、吾の如く、関の月也、此を
 を御と共し、山内春卿、一月廿九日、清く其の
 リとて、船形の書鎮を賜り、未だ、山内春卿、董

十

取次 柳 屋

全 吾 八

全 俳 畫 堂

大阪市東區平野町三丁目

東京市神田區一ツ橋通町七



朱泥閣印規

論印絕句に海忠介泥印を論ずる有曰丸泥同故玉。
 又有曰印文奇古抵瓊魂。甘旭陶齋印を説曰文類玉
 稍粗也。缶盧主人刊印如刊泥。我家累世泥業
 造鈕摹印日々欠さず。生平刻苦泥を刊りて纔に泥
 の面目を視はんこす。敢て摩玉を云はんや。

庚申秋日

攝州墨江浦
 陶叔丁自記

王廷珏



吳昌碩先生印評并書

泥印不易治作者
 喪法無習氣刀法
 古無油滑之陋習的
 是當代名手而三字
 尤古樸渾濃入骨印
 二字印亦板滯略
 作王何流弊而不幸
 經既可容也銘佩
 老未記時已暮

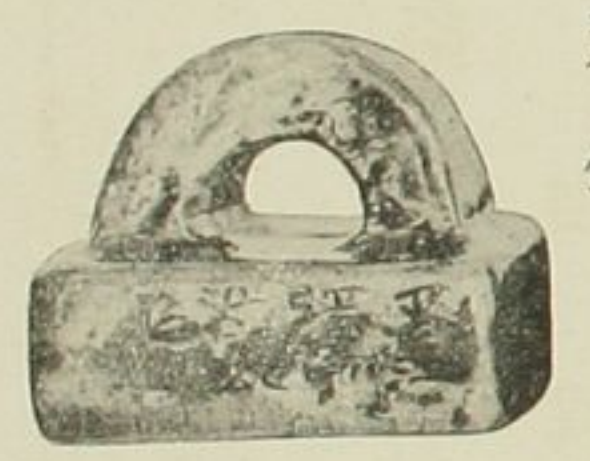
趙孫



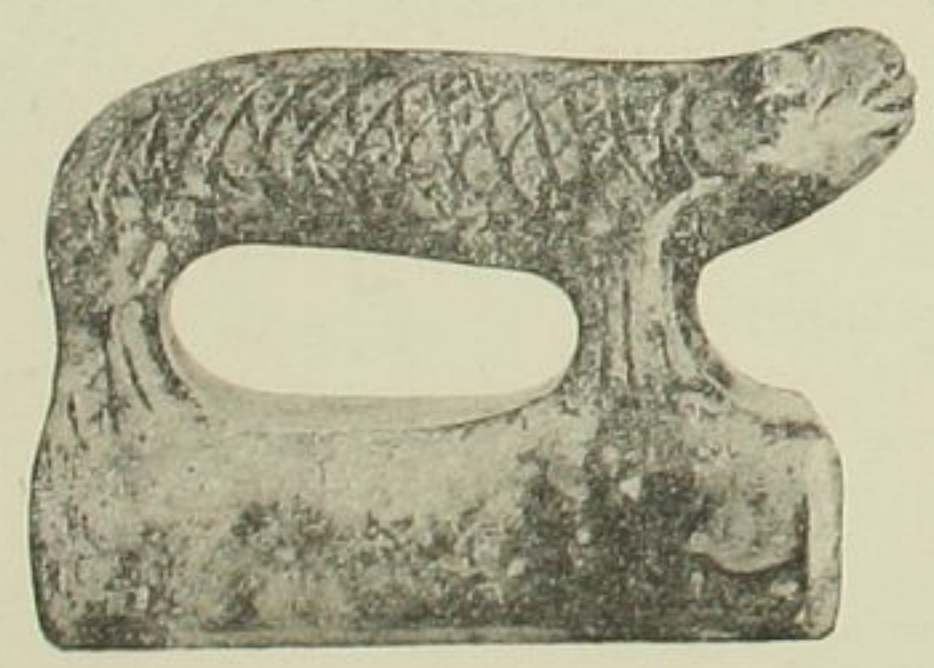
龍鈕



瓦鈕



魚鈕



石印、木印、竹印
の
造
鈕
摹
印
日
々
欠
さ
ず
。
生
平
刻
苦
泥
を
削
り
て
纔
に
泥
の
面
目
を
視
は
ん
こ
す
。
敢
て
摩
玉
を
云
は
ん
や
。

稍粗也。岳盧主人削印如削泥。我家累世泥業造鈕摹印日々欠さず。生平刻苦泥を削りて纔に泥の面目を視はんこす。敢て摩玉を云はんや。

庚申秋日

石印、木印、竹印

每字金參圓（材別）

篆書

半切、額面各金貳拾圓

制作期間

凡一ヶ月

も玩ぶことを得しんんいんをみ給ふゆいと
 一昨年江戸へ来ぬに給物を教来しと或る衣類は
 白磁の舟形に山を置きそのあしひみねに記の
 を用ひたるがあまの味も感ぜらんもれし
 きことと思ひそしに、及びて米（のきこ）と後とんて
 らんを得たる何とぞ思ふべしと思ふべし又
 箱に成方の書しなる菊の圖に蓮月の遊
 び一幅を掲げたり亦そのあし、蓮月のあ
 び

嘆そめしちよのあし、ちよのあし

秋のうきうきあきくの花

九月七十九日

花のこころをいふは、花をちよの代書し、
 田舎のあをさるけしことと思ひ出せし
 らし、其を感ぬ、昔月七十九日の花
 実方位さるけしや、ちよの代書し、
 さること其の代書し、ちよの代書し、
 将ふ氣もさるけし、ちよの代書し、
 親しむ

○杉崎協和の書物と給ふ左の七條と

(九月七日記)

存命者は二人
斯様に考へて見ると當時在社の者で生存してゐるものは竹村貞良君と自分とあるのみで、社友でも倉石和藏、丸山新十郎、室十一郎氏は健在だが、其他は大抵故人となつて居る、顧みれば此の新聞紙が積んで一萬二千號に達する迄の變遷は決して簡單では無い、兩三年前久方振で高田に往つた時、伊藤社長から招かれて柳糸郷に社員諸君十餘名と會したことがあつた、折伊藤君は起つて、自分を一同に紹介されたが、其の言葉の中に「此方が吾社の先祖である」と謂は

身することあるが創業時樂と云ふ人は田新太郎兩氏の如きも今は亡き人の數に入つた、
存命者は二人
斯様に考へて見ると當時在社の者で生存してゐるものは竹村貞良君と自分とあるのみで、社友でも倉石和藏、丸山新十郎、室十一郎氏は健在だが、其他は大抵故人となつて居る、顧みれば此の新聞紙が積んで一萬二千號に達する迄の變遷は決して簡單では無い、兩三年前久方振で高田に往つた時、伊藤社長から招かれて柳糸郷に社員諸君十餘名と會したことがあつた、折伊藤君は起つて、自分を一同に紹介されたが、其の言葉の中に「此方が吾社の先祖である」と謂は

身することあるが創業時樂と云ふ人は田新太郎兩氏の如きも今は亡き人の數に入つた、
存命者は二人
斯様に考へて見ると當時在社の者で生存してゐるものは竹村貞良君と自分とあるのみで、社友でも倉石和藏、丸山新十郎、室十一郎氏は健在だが、其他は大抵故人となつて居る、顧みれば此の新聞紙が積んで一萬二千號に達する迄の變遷は決して簡單では無い、兩三年前久方振で高田に往つた時、伊藤社長から招かれて柳糸郷に社員諸君十餘名と會したことがあつた、折伊藤君は起つて、自分を一同に紹介されたが、其の言葉の中に「此方が吾社の先祖である」と謂は

發、大に立憲思想の煥然に努めた

兩黨互に覇を唱へんとして村田

朝、後、漢、唐、宋、元、明、清、の、味、と、そ、よ

山人不慣、都、海、瓜、皮、薄、上、行

涯、回、教、奇、潮、未、生、枯、三、石、書、偏

靜、歌、喉、轉、字、蟬、聲、先、紅、袖、翻、道

整、舊、生、留、揮、心、亦、筋、以、細、音、觸、耳

少、壯、親、家、情、明、復

夏、の、茶、汗、舟、と、揮、目、行、く、墨、江、に、出、ん、と

也、柳、橋、を、さ、り、す、橋、本、酒、樓、忍、ろ、弦、鼓、の、流、く

を、に、り、ん、の、亦、瓦、十、樽、米、と、國、を、思、へ、ん

ハ、あ、れ、 九月五日

少壯者家傳 夏の巻... 酒樓忍う弦の清く... 九月五日

社業に盡瘁したる故人を憶ふ

在東京 市嶋謙吉氏談

高田新聞の一萬二千號の記念紙... 高田新聞の創業者を... 高田新聞の歴史... 高田新聞の発展...

言生予可為 情寄八荒一毫 庚申秋古一會

存命者は二人

高田新聞の創業者... 高田新聞の歴史... 高田新聞の発展... 高田新聞の創業者は二人...

上越の青年に寄す

高田新聞の創業者... 高田新聞の歴史... 高田新聞の発展... 上越の青年に寄す...

廿年前

高田新聞の創業者... 高田新聞の歴史... 高田新聞の発展... 廿年前...

遙に祝す

高田新聞の創業者... 高田新聞の歴史... 高田新聞の発展... 遙に祝す...

960 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60



社業に盡瘁したる故人を憶ふ

在東京市嶋謙吉氏談 (社員筆記)

高田新聞の一萬二千號の紀念紙に何か所懐を述べよと伊藤社長がさういふ京されての需めであるがこれ迄幾々の紀念に大抵言ひ盡して居るので、重複を避くるとなる。談話の材料が幾んど無い様である、併し折角のお需めであるから、既に故人となつた社中の人や社友に就て、聊か語つて見よう、併し記憶が甚だ朦朧で姓又分つて居つて名の出し出せぬ人もある、又姓を共全く忘れて仕舞つて擧ぐ可き人を逸するものも幾らかあるに相違ないが其邊に讀者の諒恕を乞ふの外はない。

當時の社中の人

先づ日々新聞社に出勤して筆を執り或は事務を執つた人々を假りに社中の人と名づけて、既に故人になつた人々を願ひると七八名乃至十名を數へることが出来る、先づ社務を總理した中川源造君が歿して居る、編輯に與つた齋藤謙次郎、古橋包正、設樂正吉の三氏が故人となり、自分の後を承けて主筆となつた侯野時中氏も自分の幕賓として助筆した枝元長辰氏も逝き、會計事務を司どつた丹羽某氏や新聞の署名人となり傍ら探訪の務に當つた新田忠誠、花井某氏も故人となつて居る、まだ外に二三ある様だが今は其の姓名を思ひ出し得ない。

物故したる人々

今談話の序に、歿した人々を追懐し多少の言を爲すは必らずしも無用であるまいと思ふ、中川君は春日町の富豪で、温厚快濁の人であつた、創業當時自分は社長の名を肩したから、中川君は社主と云ふ名義であつた、其の名義の如何に拘らず、君は則ち經營の總理であつたのである、困難時代の新聞を護り立てたのは全く君の徳望に據ると謂はねばならぬ、君は豪酒の一人であつたが、加何にも酒落な意味の無い人であつた、社中の肉滿ち治まつたのは全く君の人格に因ると云はねばならぬ、君の天壽も長からなかつたが、併し一たび衆議院に議席を有して逝かれたのは切めての事である、氣の毒であるのは、編輯に當つた人々の短命であつたことである、齋藤氏は温厚の性質で編輯局に口論でも起るといつても仲裁をする立場に居つた、社業を興起する時などは竹村氏と共に株金や寄附金を募集することにも努力した、功勞があるが創業時代に早く歿した、設樂と云ふ人は痘痕のある瘦れ身軀の若者で、深い教育を受けた譯でも無いに、文筆の才があつて、馬琴風の小説を書き、艶麗の記事をよくしたので、横明邊の艶麗は此人の受持で頗る重寶の人であつた、此人も不幸創業時代に鬼籍に入つた、古橋氏は司法省の法學校出身で、相當の學殖があり、又能文の人であつた、唯だ狷介の性質が累をなし、終に志を得ず、社を退つて後某地方の小吏となつて終つたと聞くが、惜しいことである、此人は編輯局の一悍馬で當時氣鋭の目も此人を御するに可なり、骨が折れた、併しなかく面白るい所があつた人で、或る年無銭旅行を思ひ立ち數百里を慰月か

言生るる
情寄るる
庚申秋

存命者は二人

斯様に考へて見ると當時在社の者で生存してゐるものは竹村良貞君と自分とあるのみで、社友でも倉石知藏、丸山新十郎、室十一郎氏は健在だが、其他は大抵故人となつて居る、願ひれば此の新聞紙が積んで一萬二千號に達する迄の變遷は決して簡單では無い、兩三年前久方振で高田に往つた時、伊藤社長から招かれて柳糸郷に社員諸君十數名と會したことがあつた、其折伊藤君は起つて、自分を一同に紹介されたが、其の言葉の中に「此方が吾社の先祖である」と謂は

創業時の功勞者

以上は編輯に従事した故人の大

通俗の社論を日載して文名を博したが、これも不幸にして早く歿した、君は慶應出身で、愛すべき美人の人であつた、扱又侯野時中氏は自分を繼承して一代主筆となつた人である、自分共が筆禍で入獄することになり、其筆の繼承者を東京に相談した時に、大森木堂君の推薦で来たのが此人である、侯野氏は秋田の人で古橋君同様司法省の學校でアツベルの教を受けた人である、相當の學殖があつて漢文に長じ殊に漢詩を達者に作るを誇りとし、兼て刀劍の鑑識に長じて居つた、豪傑肌で酒をよく飲み、酒を辭せざる概があつた、其の相貌も何となく繪にある猿哈に似て居つた様に思ふが、狷介人と和さな性質が高田の人氣と折合はなかつたか、長く足を留めずして去つて東京に戻つてから今の早稲田大學の前身東京專門學校の寄宿舎の舎長となつたこともあつた、此人も亦割合早く故人となつた、以上は外に間接に社業を助けた渡邊健藏氏や東頸城の健治氏や西野城の磯貝健治氏

立憲國民黨常議員會長

古島一雄氏揮

故人を憶ふ

市嶋謙吉氏談

略である、更らに社の創業を輔けた...

味川吉雄氏や直江津の石塚六三郎...

上越の青年に寄す 在東京 増田義一

言主する可なり 情寄る人老る老 庚申の秋を一念

通俗の社論を日載して文名を博し...

此等の人の宅を訪ひ、談笑の時を...

廿年前 東京、婦人之友社に於て 羽仁吉一

遙に祝す 陸軍中將 大多和新輔

創業時の功勞者 以上は編輯に従事した故人の大...

創刊前後の感想

在東京 竹村良貞

高田新聞が、十月四日を以て、其の一萬二千號を發行するに際し、余に創刊前後の感想を書けとの要あり。ペン握つて机に對せば、四十年前、頸城三郡の天地に澎湃として怒濤の如くに漲り起つた自由民権の思想の流に棹し、郷黨の先輩等が、家を忘れ身を忘れて、因襲の陋風を打破し、邦家の爲めに虹の如き萬丈の光彩を煥發したる、當年一幅の活畫が、髪髯として眼底に映發し來つて、聯想は更に聯想を産み、或は某所の會合に半日の舌戦を闘はして、頸城に於ける自由民権の大勢を築し、或は旅店の階上に「高田新聞」の編輯局を設けて、轟動たる滿腔の熱を吐き、或は駄馬に鞭打つて社財の募集を講じ、或は頸城の天地を震憾せしめたる自由民権事件に關する筆禍に連座して、社内幹事として獄裡に呻吟せし如き、幾多の悲慘壯快の跡が恰も走馬燈の如くに起伏隠顯して、感慨無量、心は疾くも明治十五年の昔に飛ぶ。

當時の中央政界

余が三田の學窓を出て、歸郷したるは、明治十五年にして、時恰も國會開設の詔勅は前年を以て煥發せられ、猫も杓子も、自由民権を口にせざるものなき状態にして、苟も當時の新智識は争つて、ルウソウ直譯の民権論を振り廻し、我が國民思想の根柢を横流貫通せる者は、實に立憲代議政体樹立の運動であつた。斯くて東京には沼間守一、嶋田三郎氏一派の囁鳴社あり、矢野文雄、大養毅、尾崎行雄氏を主領とする東洋議會あり、土屋光華氏等の北辰社ありて、毎月各所に政談演説を試み、卓勵風發、大に立憲思想の煥發に努めたものであつた。

旅館が編輯局

爾來三郡の政界は、改進黨、自由黨、進歩黨と唱へんとして、旅館に於ける迄、二派に分れて、其の態度を明かにし、五人、七八集まれば直ちに政談演説を開始するといふ有様にて、其の壯烈なる意氣と純白なる感情とは、到底今日の青年輩の及ばざる尊さがあつた。余は歸郷以來、言論文章の力に依るにあらざれば、國民の政治思想を涵養し、地方文化の向上を圖ることの到底不可能なるを信じ、二三の友と相圖り、「高田新聞」創刊の議を提唱したのであつた。

頸城自由黨の疑獄と高田新聞

頸城三郡の天地にも言論の機關漸く備はり、政論益々盛んにして高田新聞も日を追ふて整頓せしが、當時頸城自由黨の一大疑獄起り、天下の耳目を聳動せしめたるを以て、高田新聞は全機能を擧げて該事件の顛末を精査し、事の真相を

十年の昔の事として、時代は頗る幼稚にして、所謂新聞の創刊に耳を藉さず、資金の調達のため、余と齋藤氏は駄馬に跨つて、東頸城の山中遊説募集に力め、東奔西走、殆んど奔命に困憊せし。幸に先輩友人の協賛を得、明治十六年四月一日を以て、其の第一號を創刊するに至つたのである。是より先き、余は新聞發行の準備のため上京して、當時山田一郎氏と共に「内外政黨事情」を發刊せし市嶋謙吉氏を聘して社長となし、余は印刷人として署名し、編輯、營業の實務に當り、經營頗る努めたのである。斯くの如くにして、我が高田新聞は創刊の時の編輯局を吳服町に在りし原と言へる旅館の二階に設け、同旅館の筋向ひ側面にありし印刷所にて印刷を爲し、編輯に發行の料を徴せりしが、

大倉男爵寄贈の祝歌

自由民権の旗を掲げしは、
我が高田新聞の創刊の時、
大倉男爵の寄贈の祝歌、
自由民権の旗を掲げしは、
我が高田新聞の創刊の時、
大倉男爵の寄贈の祝歌、

獄裡の苦役

當時交通機關不備の爲め、用紙の供給絶へ、是非なく清水紙を二枚摺ぎ合せて漸く印刷せし事あり。今より考ふれば、眞に滑稽の如き感に堪へざるも、當時余等の心情は誠に悲壯なる者であつた。當時の編輯には、古橋包正、齋藤謙吉、二名、設樂止吉氏あり、編輯以外委員として中川源造、大井茂作、上田岩之助、高橋慶次郎、室十一郎の諸氏あり、是等の諸氏は高田新聞を産み且つ育てたる恩人と謂ふべきである。

監獄より監獄へ

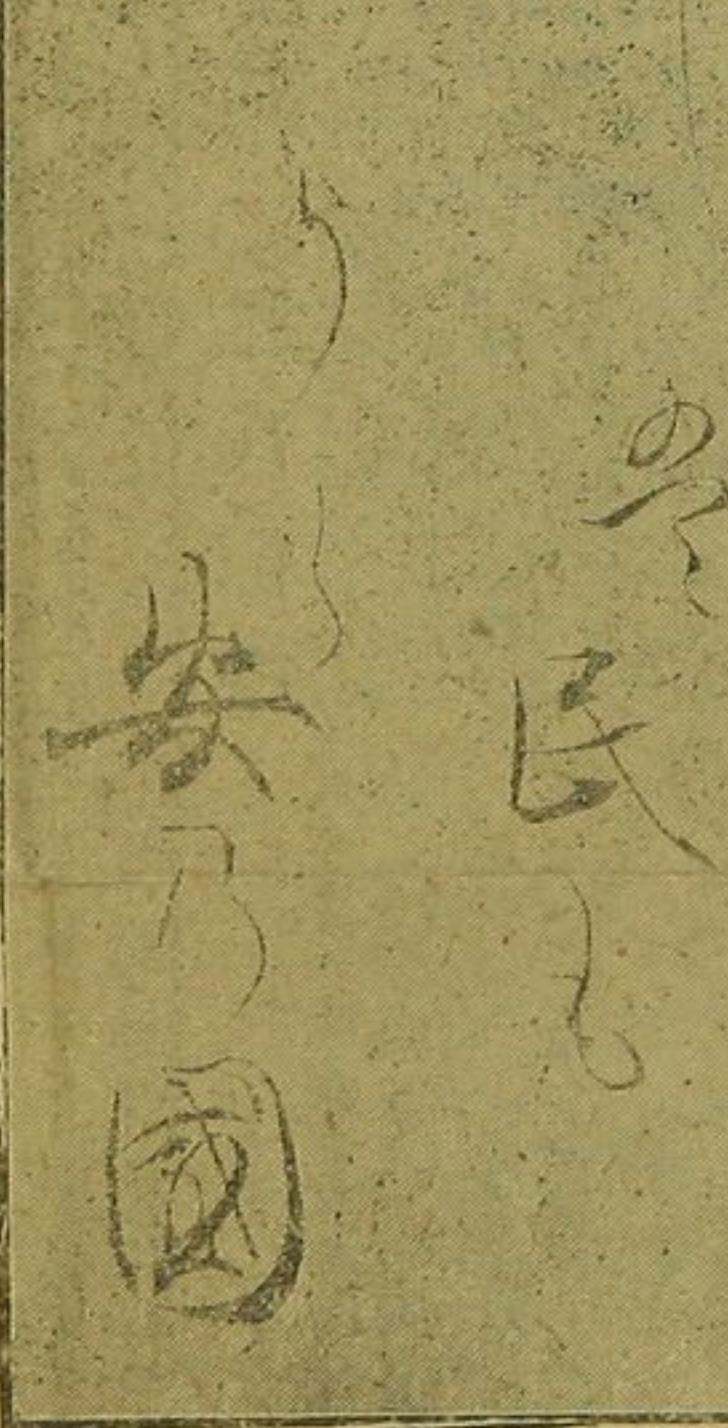
今日迄の仕事は大前辛らかつたらうが、今後は囚人の希望に依りて、彼等に讀書の世話をされたしとの事なりしを以て、繩網の傍に於て、面を受つ事となり、以來精神の苦惱は依然たるも、肉體の勞苦は余程楽になつて來た。

斯くの如く、殆んど地獄に等しき勞苦に服し居る内、新聞紙條例違反の方が控訴院より長野裁判所に移送せられしを以て、新潟監獄を振り出しに、所々の留置場を渡り歩き、長野監獄に収容せられたが、此の時途中捕虜の附近に於て、中川源造氏の新潟に行くに會し、氏に伸より降りて談話を交はし、時、看守の許しを得て、附近の某茶店に休み、久し振りにて婆婆の善い變を受けたるは、今猶忘れ難き記念である。

十年の昔の事として、時代は頗る幼...

大倉男爵寄贈の祝歌

大倉男爵の御寄贈の御祝歌... 祝歌の本文



今日迄の仕事は大前辛らかつたら...

獄裡の苦役

敢然として司直の府を痛撃し、...

疑獄事件の根拠

抑も、此自由黨疑獄事件は、前...

出獄後の兩人

余は刑罰満ちて出獄、長野より...

詠彌彦國上

由來上越の地は、山高く水清く...

二山短歌

相馬御風

士氣の振作

伊藤 昌庸

頸城自由黨の疑獄と高田新聞

頸城三郡の天地にも言論の機關...

獄と高田新聞

士氣の振作

詠彌彦國上

二山短歌

新著、後述するもの、興味をそそぶ

ものであつた。斯くて一面には、政界縦断の機運起り、此年東京に於て板垣伯を總理とする自由黨に對して、立憲改進黨組織せられ、木挽町の明治會堂に其の立憲式を擧げ、大隈侯を總理に推戴し、河野敏謙、前嶋密、小野梓、沼開守一、矢野文雄氏を初め、在野の諸名士を網羅し、更に三田の一派も是れに加はる。余は東洋議會に籍を有せし關係上、矢野氏等と共に之に馳せ参じ、其の立憲式に参列して、先づ中央に於ける立憲代議政治促進の第一歩に參加したのであつた。

甚しきに至つては、旗亭、旗館に至る迄、二派に分れて、其の態度を明かにし、五人、七人集まれば直ちに政談演説を開始するといふ有様にて、其の壯烈なる意氣と純白なる感情とは、到底今日の青年輩の及ばざる尊さがあつた。余は歸郷以來、言論文章の力に依るにあらざれば、國民の政治思想を涵養し、地方文化の向上を圖ることの到底不可能なるを信じ、二三の友と相圖り、「高田新聞」創刊の議を提唱したのであつた。是より先き、余の尙ほ在京中、古橋包正、久代孝次郎の二氏此の議を携へて歸郷、大に郷友と協議せしむ、時期至らずして中止の余議なきに至つた。而して余は友人齋藤誠次郎氏と共に在京中、古橋久代兩氏の此の議に參加せし關係上、兩人更に相圖り、飽迄初志を貫徹すべく決心して、之を政友其他の諸氏に提議し、言ふべからざる苦心を拂ひし、今を去る約四年

獄と高田新聞
頸城自由黨の疑
當時交通機關不備の爲め、用紙の供給絶へ、是非なく清水紙を一枚繼ぎ台せて漸く印刷せし事あり、今より考ふれば、眞に滑稽の如き感に堪へざるも、當時余等の心情は誠悲壯なる者であつた。當時の編輯には、古橋包正、齋藤誠次郎、齋藤止吉氏あり、編輯以外委員として中川源造、大井茂作、上田岩之助、高橋慶次郎、室十一郎の諸氏あり、是等の諸氏は高田新聞を産み且つ育てたる恩人と謂ふべきである。

獄裡の苦役
敢然として司直の府を痛撃し、飽迄官憲の非違を糾弾したる高田新聞の社長市嶋謙吉君と、印刷人たる余とは、當時極端なる専制の時代とて、入獄中に於ける虐待の如きも、他の普通一般の囚人以上に猛烈なる者があつた。其新瀉監獄に在つては、特に典獄が余と市嶋君とを呼び出し、看守に内命を傳へし者の如く、土工等の仕事たる某學校の地形を爲すべき奮擲の苦役に當らしめ、獄裡に於ける所謂改心モツコなる者や擔がしめられたのである。此の改心モツコは普通なれば土を盛る事八分位位なるに十分も十二分にも盛り上げし者に、余等の如き筆硯のみ仕事せし者には到底堪ゆる處にあらず。肩の皮は破れて鮮血滲じみ、氣息喘々、遂に打ち倒るゝ事あり、其の都度鬼の如き看守は來りて、靴

今日迄のうが、今彼等に請事なりし面を受持苦惱は倍余程樂に監

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

シのすく、こゝに収め、林村の法廷も余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

○高田新聞第一巻二千冊と寄る余の法廷と野

る、この併せを収めると、五月廿

版をもちもあつた致うある、無論死うらむはあつた、
あらむ、無いか、
十月八日記

○吉田は正段致すの遺刺持孫令帰し、今位此
心行全部を大木^{五十四}殿に刻し、遺印余の熟知
のちのうんも持来り、別へ無しと答ふ、思ふ
生前人に好うする日る、歎息し、然りとす、
のち也、正段の印講をも心ん、此の心行目と
恰今のちのうんも然らん、今、友死印置一個
とせ、持来り、荒干の筆に換ふ、ことと、需む、依
つて、印のる、存在すと、知り得る、あ、合未

十
十

二人の遺命をいしとんむとす、離さぬ、哀さうし、物々



此印卷子形の不逞な寸隙を巧みに装束し
あり、故に其書軸の書し心経、小字子首端にあり
今荒干の印をそくろん按ず、倫次あるものありと
す也

承正二心経の印を刻し終りたるものあり

(十月日記)



其印譜と終り今出し及ぶるに、西二月初
旬始に今年六月完了とあり、四月月を費
して奏刀せしこと見らるし。

小栞屋中此の印譜と置るは、
すし開に乘して二冊のふと、五十四枚を按し
り、唯此此の印卷子形の二匣に紙巻心輪式
に装束しあり、
部納るる能う、印譜成る後、多の杜を
を試みよも舊の如く、
しては、此の版の装束、
面側、困惑
印面と

磨擦しぬ^{て甚かに}支那の法に倣ふと云ふ余の
取らざる所也

○家祭^祭秋村七絶の幅あり頃者別業の架り
とと拙き未り、考案に揚げて見る、詩三回

朱雲化甘雨練汁際平時趨處乍無夏今
年應有秋染深低待腫露重甲申未

頰^{田家}後^{田家}如^{田家}儒^{田家}素^{田家}逸^{田家}人^{田家}即^{田家}滿^{田家}舞^{田家}

詩古共^{田家}風^{田家}韻^{田家}あり、秋村河波の久^{田家}道^{田家}終^{田家}六^{田家}中^{田家}協^{田家}會^{田家}
その別業^{田家}あり、松山旭在^{田家}古^{田家}村^{田家}おこ^{田家}まぶ^{田家}古^{田家}三^{田家}絶^{田家}に
あり友人の^{田家}一^{田家}と^{田家}と、三^{田家}期^{田家}考^{田家}え^{田家}秋^{田家}村^{田家}の^{田家}大^{田家}う^{田家}腹^{田家}し^{田家}詩^{田家}

古昔に及ぶ^{田家}あ^{田家}と^{田家}る^{田家}あり、秋村事^{田家}に^{田家}ほ^{田家}し^{田家}て^{田家}猶^{田家}と^{田家}技^{田家}
す、同^{田家}志^{田家}あり^{田家}斬^{田家}と^{田家}秋^{田家}村^{田家}之^{田家}れ^{田家}と^{田家}傷^{田家}み^{田家}情^{田家}場^{田家}邊^{田家}揚^{田家}を^{田家}
病^{田家}領^{田家}洲^{田家}を^{田家}老^{田家}と^{田家}遂^{田家}と^{田家}病^{田家}て^{田家}歿^{田家}す、年^{田家}四^{田家}十^{田家}六^{田家}、若^{田家}秋^{田家}村^{田家}
長^{田家}壽^{田家}あり^{田家}と^{田家}ば^{田家}三^{田家}沙^{田家}と^{田家}して^{田家}文^{田家}林^{田家}と^{田家}名^{田家}と^{田家}擲^{田家}と^{田家}
せしめ^{田家}せ^{田家}ら^{田家}う^{田家}し^{田家}る^{田家}ん、秋^{田家}村^{田家}の^{田家}詩^{田家}書^{田家}の^{田家}の^{田家}遺^{田家}也^{田家}
を^{田家}山^{田家}形^{田家}に^{田家}あ^{田家}り、都^{田家}下^{田家}の^{田家}人^{田家}多^{田家}く^{田家}あ^{田家}り^{田家}と^{田家}る^{田家}に^{田家}已^{田家}
ひ^{田家}と^{田家}此^{田家}の^{田家}舊^{田家}余^{田家}の^{田家}人^{田家}と^{田家}言^{田家}す、偶^{田家}と^{田家}秋^{田家}村^{田家}遺^{田家}也^{田家}
と^{田家}後^{田家}也、一^{田家}二^{田家}の^{田家}詩^{田家}を^{田家}あ^{田家}す

所見和春の存を所歎

夜は生寒酒の微河禽暖に掠舟元一星燦

枯蒲衰知有漁家未掩扉

戲擬句詞

連雲無聲天欲曉
黑雲下垂沙漠小
忽見寒山點翠來
却是神將擒白回
不教陽鐵石風吹
髮笑倚杖劍印名
在月

秋句尤氣格溢
長篇其句尤得
意也
十月九日記

日修書中
此古年印人
寒山寺之山
西平游
開店人之需
之度之
方之
收之
印之
也
心也
十月九日記



師古



心安
開放



維月
不足



和光
同塵



芳林
東隱
陽春
鐘



池魚
自樂



元江
藏金
書記



送院
江隱



香令
八幽



大
去



抱壺
權圖

大正九年十月
製於東都
寒山寺西平



東 嶽 谷 小
官 命 會 委 員

大 五 次 年 十 月 十 日

張丁座前の場合。右之半時手録中にある。一、時旅業協会の官無符紙と回附券と類似

新 對 此 對 聯 案 內 申 上 列 草 々

新間當日は是非聯來其の左も蓋りやうと云
限更の日初り然了初幕左さ擧ぐさの野心も
信書延居初魚田官命縁回轉裏端の義も愈落如
殊命の初原時動翻奉賢初刺おはぬ了聯替組の寸
我 習

拜啓

秋冷の候愈御健勝奉賀候陳はかねて御賛助の下
に計畫致居候角田竹冷翁句碑建設の義も愈落成
別項の日時に於て除幕式を擧ぐるの運びに相成
候間當日は是非御來臨其の式を盛にせしめられ
候様此段御案内申上候草々

追て準備の都合も有之乍御手数數封中はがきに御加筆御來會の有無折返し御報被下度候

大正九年十月十日

竹冷會委員

東京

巖谷小波

星野

坪谷

黒須

島田

和

間

瀧

平

井

川

宮

静

愚

右

佛

霞

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

郎

幹事

京都

沼津

服部耕石
林部
星野
佐藤

平井右平
瀧川愚佛
間宮静霞
和田傳太郎
島田三郎
黒須龍太郎
坪谷善四郎
星野

除幕式

△東京神田 白魚の碑

□十月十六日 (土曜) 午後二時

神田明神境内に舉式

其の前同社境内開花樓へ御參集被下度

設計 東京美術學校教授 津田信夫氏

△駿河沼津 時は彌生の碑

□十月二十四日 (日曜) 午後二時

沼津千本松原に舉式

其の前同所へ御參集被下度

設計 同 上

△京都嵯峨 竹の春の碑

□十一月十四日 (日曜) 午後二時

嵯峨清涼寺(釋迦)境内に舉式

其の前同所へ御參集被下度

設計 京都帝國大學教授 田五一氏

あこ杖の説明

神田及沼津の句碑は形状一見奇なるが如きも、これは故竹冷翁が愛用せし「あこづえ」といふものに象りたるものなり。原本は長さ一尺六寸のものにして、其の上部灣形に願を載せ、下部を膝に置き、穴は指を入れて位置を定め、安座して冥想工夫を凝らすに極めて妙とすべし。故翁が之を杖いて、幾多の難案を解決し、數多の名句を案出し得たるべきかは思ふに餘りありとす。以て紀念としたる所以也。

○可々漢多散集淺々尾古店に三寄り其角の
集四行を燭り

みろく一粟 二冊

新山家 一冊

いつと昔 一冊

追尾琴

三冊

其角の撰集と可々其角自由軒と刻してどうと云
あ所をうらこし可々其角の撰集と云ふは此の四
種價十圓五十五圓といふ、此集古歌を例者稀観
のよるとるなり、四種の由追尾琴と寛保三年
の再吟のうらこしを傳と皆元禄版の淺名を
人の説きよめたるは追尾琴の由追尾琴と云
し版の附しつるは改本も家も存ありし
の明和の頃此方より傳はせし由十月土の記
○家集：平山士流の古函荒干あり一と梅山

舊花え士流世画貨一白常の 疵也余此等の者
 畫を意観するも此人の風格を想見し化政の
 天地より生れる人を生じさう、人々多く此人を目し化政
 の山本素行と云ふ如くも似て居る者あり、然るも彼の
 の行状を尋ねて見ると、或は衝動然と云ふ事あり
 おやと、余の之れを終らざるとして、彼人の行状の詳
 細を知る所あり、此頃偶々日本人相馬大化の傳を
 叙する序に下斗米將真の事あり、終に其の
 士流の事を知り、初め其の詳細を知り、彼人の
 言行の奇蹟と云ふ本真を出るを知り得たり、

彼人の四谷の豪傑の事
 あり、又化政天地の一豪傑
 と謂ふを得べし、椿山の之
 らの事も一豪傑と改
 し、又ありあり
 十月十一日記

平山は有名なる夫の所謂兵原先生である。先生名を潛字は
 子龍、兵原は其の號である。四谷の伊賀衆の家に生れ、世々
 家祿五十石を喰む。祖父梅翁、父勝壽孰れも劍を以て聞えた
 人である。行藏幼にして劍を好み、夙に當時の兵學者として
 有名なる、松齋(一に)山田茂右衛門の門に入り出藍の譽れあり
 同時に十四五歳の頃既に書を讀み之を屬せしかば、選れて昌
 平校に入り、尋て普請役に擧げられしも、病ありと稱して之
 を辭し、爾來益々讀書に務め、夜も臥床に入らず、机に倚り

て假寝するのみなりしかば、遂に禮樂、刑政、農桑、水利悉
 く究めずと云ふ事なく、特に兵書に意を用ひければ、家藏の
 和漢兵書一千八十餘部、城壘、戰地、機械圖四百二十餘に及
 んだと云はれて居る。人となり豪邁にして、常に長刀を帯び、
 鐵椎を杖き、草鞋を着けて市中を往來したと云ふ傳説も残つ
 て居る。行藏常に諸流の武術、往々虚飾に流れ實用に適せざ
 るを慨き、苦心慘澹遂に諸流の長を併せ、一流を創案し、之
 れを實用流と名づけ、門弟に授けて居たが、其門弟を待つや
 頗る嚴に、而も自ら常に揚言して「凡そ士たる者は、平時居
 家の時と雖も尚ほ、陣中にあるの心を以てすべし」と唱へ、
 身自ら實踐躬行、衣袖は臂を露はし、裾は膝に及ぶを法とし、
 嚴寒と雖も綿衣一襲を纏ひ、又外套と襪子とを用ひず、寢は
 地板に蒲席を敷き、食は玄米を炊ぎ、鹽水に浸して喰ふと云
 ふ風で、其門生にも之れを強行したが、然も其性極めて温厚
 上を敬ひ下を憐み、勇あれども猛からず、智あれども誇らず、
 只管に信義を以て人に教ふと云ふ風であつたから、遠近期せ
 ずして其徳を慕ひ、來りて其門を叩く者前後通じて二千餘名、
 寄宿門生亦常に四十人を越え、當時世上行藏を以て承應萬治
 の山本素行に比し、化政の素行と稱する程であつた。將真の
 秀之進は、實に此の兵原先生の門に入つたのである。宜なり
 承應、萬治の素行は、其門に元祿義舉の頭目大石良雄を出し、
 化政の素行亦た其高弟に下斗米將真を出す。偶然とは云ひ乍

平原先生と栗山

以上の外、兵原先生に關する逸話は、随分と傳つて居る。今其の一二を摘記すると、先生は前に記せし如く、劍術、兵學を、松齋山田茂右衛門に、柔術を澁川四世の孫、澁川伊五郎秩山に學んだのであるが、其の十四歳の時、師松齋義に因つて獄に就き、網乗物で郷里信州に送られた事がある。時に行藏、師父に對する別離の情忍び難く、輿を追うて師の後を慕ひ、護送の役人に向ひ調を請ふ、而も無情役人は拒んで之れを許さぬ。行藏更に再三之れを願つたが、毫もそれに耳を傾けて呉れぬ。茲に於てか行藏大に怒り、「愈々許さぬとな。然らば汝と勝負の上、恩師を奪ひ歸るまでなり、異議なく許さば、此儘會釋して歸るべし、如何に！」(常山)と、血相變へて役人に詰寄せた。茲に於て護送の役人も其の權幕の重ならざるを恐れ、遂に其請を容るしと云ふ事である。是れ宛然小説講談の、大石山鹿護送を逆に行つた形である。而も夫れは架空の虚説、是れは真正正銘の實説である。僅に十四歳の、未だ總角の若齡にして此の如し、後年上書して市井の無頼漢、並に囚徒を率ひ、敢然魯寇を討たんとせる、蓋し宜なりと云はねばならぬ。先生また性狷介、門弟に對しては能く其の情義を盡したが、他と交遊するは、極めて其の厭ふ所であつた。南梁翁又た記して曰く、

寛政の末に柴野栗山、書を寄せて行藏を招ぎしに、行藏足疾ありとて辭しける故、然らば肩輿を以て迎ふべければ、疾を勉めて來られよ、據所なく面話を要したき事ありと云

の者が國家の爲身命を捨てたらんには、世祿譜代の旗本も之れに激勵せられ、少しは士氣を振起する者もあるべしと。此時栗山七十ばかり、咳嗽を患ひたりしが、年を越えて歿しければ、行藏永く其策の行はれざるを惜みしとなり(太平記)

平原先生と逸話

平原先生が斯く、無用の交遊を避け、就中殆ど、極端とも云ふべき程、儒生を厭忌したりしは、一つは其の先天的氣質にも據らうが、其の重大原因に至りては、當時の所謂儒生なる者の多くは、夫の摘章講句眼光宛として豆の如く、何等天下の大勢に通ずる所なき、迂愚の腐儒ばかりだつたから有らう。一口に云へば、平原先生の儒者嫌ひは、聊か羨に徴りて胸を吹くの嫌ひ無きにもあらざりしも、而も先生をして其の此所に至らしめたるもの、亦た當時の儒生に與つて罪ありと云はねばならぬ。南梁翁は此間の消息を傳ふる一例として、下記の如き平原先生の逸話を、同書の中に紹介して居る。曰く、

行藏尋常の儒生を喜ばず、盛名ある者と雖も、敢て交る事なし。曾つて紀效新書を校刊せし時、古賀精里其の書に序せしを見て、余が頼みしにもあらざるに、入らざる世話なりとそしりしとぞ。精里と雖も此の如くなれば、其他は知る可し。(臨川) (太平記)

果然、是れある哉、先生の栗山をすら、尙ほ尋常一様の腐儒視し、一度其の面話を回避せし事や、蓋し偶然でないのである。要するに行藏の主義は、徹頭徹尾、尙武實學であつた

ひ遣りしに、行藏答へて、余は從來肩輿に乗りし事なければ迷惑なり。加之余佩ぶる所の刀三尺五寸に餘り、柄鞘併せて五尺に及べば肩輿に入る事能はずとて固辭して應せず。這は行藏栗山を以て、尋常の經生と思へるが故なり。居る事數年、文化四年蝦夷地に魯人の變あるに至り、栗山其門人横野多門次郎を以て行藏を招ぎ、且つ志を通じて曰く、某從前の如からんには是れより直ちに伺候すべけれども、今日は儲君の侍講となり、外交を禁せられ居れば如何ともすべからず。然るに外寇の事に就き、是非面話を致したければ、折を見て來訪せられよとあり。行藏乃ち諾して栗山を訪ふ。栗山大に喜び且曰く、夷人入寇の事斯くあるべしとは、余十年前より先見せり。故に往年足下の來願を請ひたり。當時余は足下共にエトロフに渡り蝦夷を集めて武術を教へ、以て攻守に備へんとせり。此策たるや創意は余にあれど、訓練は足下を勞せざるを得ず、故に相謀らん爲め足下を要せしなりきと。行藏聞きて栗山の志甚盛んなるに感じ、其相見の早からざるを悔へり。是れより二人北海警備の事を論じ、栗山が士卒を訓練し艦船糧食を備へ、カムサツカ地方迄も推渡り、魯境に漂流其地に残り居て、我虚實を彼に告げ知らせし船頭常藏を追捕禍根を断たざれば止むべからずと云ふに至り、行藏節を撃つて嘆稱し、先生の卓見此に至りしか、天下舉りて皆守備を議す。先生獨り攻戰を論せられし事、其差殆ど天淵なりと。栗山又曰く余や弱劣、蒲柳の質にて蝦夷地に赴かば、必ず死すべし、然れど聊か悔ゆる所なし。余は近頃召出されし者なり。今參り

ので、其の工風に成る武藝十八般に、冠するに實用流の名稱を以てしたる、決して故無しとせぬのである。加之先生は何所迄も實行的の人であつた。然れば其の尙武實用主義も、單に之れを唱へ、門下に授くに止らず、先生それ自身先んじて實用範を子弟に示したのである。是れに就いて南梁翁は、同書に更に左の如き逸話を傳へて居る。曰く、

編者(南梁翁)弱冠の昔し、府下に物學びせしとき、或人の話するを聞きしに、谷中邊に養珠院と云へる修験者あり、年齡七十にあまれども、極めて頑健なる老人なり。この老人毎朝、夜の未だ明けざるに起き出で、井戸の水を汲みて、頂上より注ぎかくる事數桶、訖はれば大なる棍棒を取りて、打ち振る事數百遍し、然る後に法衣を着けて讀經をはじむ。毎朝かくの如くなり。或人吾子は方外人なるに、如何なれば斯かる事をするぞと云ふに、彼の修験者答へて、我少き時、平山行藏の塾に寓せしが、行藏、毎早斯くする故、余もこれに倣ひて日々斯くしたるに、後には慣はしとなつて、一日も忘るれば、眠食共に快よからず、故に今も尙ほ斯くするなりと云ひしとぞ。因みに此に附記しぬ。(上同)

斯うした平原先生の逸話は、到所傳へられて居るが、皆何れも殆ど、其の尙武實用主義に、基礎を有せざるもの無しと云つても、毫も差支ないのである。

我が下斗米將真は、實に此の如き人物に依りて、其の青年時を董陶され、陶冶せられたのである。

○陶説三冊を購ふ、卷首は葛西因是の序あり
文化丙寅賜月とあり米尾者す、米尾刊年
を缺けとも、序文の年号を以て推すべし、余の
従来知の所の和刻陶説は大本(山陽の序あり)
木米の刊する所一、此成務者霞刻本一、
あ非多評文を以てする一、而して因是本と余
の未だ知ざる所也、此本亦珍重と稱する、是の
余ら、梨舟大下師説を花をも、随つて對比
の便ありしと、巻も体裁も異なる、此本霞
刻本より寸尺長く大本に比するは幅狭き

似たり、拙り、鮮明精刻の整心貯る傍訓を附
たり、巻尾に出版所を示さず、河多、此の版木
尚ほ存するや否や、價十一圓也、十月十一日記
○頃、毎夜寝後秋村遺稿を讀み、秋村の稿
流りも、七人誌を讀まざる、吾輩の流り、三人の
言表に出づ、秋村の友人也、三、海屋又、我日
邦日、年来未だ有之詩也、と云ふもの、直つて、三
海城、と云ふ秋村の親友なり、而して、
穢、と云ふ秋村の友人なり、
湯、の流り、ありき也、本、河、尾、に、

を題す其内云く性靈陶冶洪鍾火鑄出萬象
何大才標新鉤異斥陳套千言萬語皆瓊瑰
何必夸張開天格小兒音後任喧騰と名し和巴の
言ろん、森抱南種作の題詩を評し中こ曰く
我固之有梅墩秋村鐵塊猶如烏域乾隆有
袁趙蔣三家鼎峙詩文壇較輾千古と而して梅
墩鐵塊世の著るん秋村の著るん其の早く
及べらう不耳、新編、三子、山詩才秋村を才
一に推さるるを得やる也秋村の第一七と河旭存の
強き、河の目強を興くする六以て許す不ある

と推さくし秋村茶茶を姓とす時人或茶栗山
の子孫一と誤解するものあり秋村のため二
と詠ん其の誤解を解く二の載るるや
ある世俗大才を曰ふと動かしんた大家の系血に属す
と附会する此の誤解の如き偶々其の青腕類の馬
時人の耳目を聳動し一証と為すを得ん歟秋村と
五岳と交はること厚し遺稿中一岳の画に題する詩
多し而して岳を遺稿の甚き首に二語を題し一目
ハ秋村の酒豪を云ふ一斗万石論詩函偉前或
是事あり蓮云く忠の秋村の奇詭教を句多く

ハ道杯中とて並り出づれば其の力ありて其の歎、河
野夢玄(織奥)の野々詩の引に云く「余其夢玄肝
膽相投、親比骨肉」と云ひ又書玄每飲酣以清婉
曼微之音唱其詩、余輒更为曼微悲凉之音
相和聽者情然而哀慨然而奮、未必不勝吹竽鼓
瑟也」とあるの文句を尋ねると又其の詩酒前を
の徳を記し、秋村書と能くす造行中
其表切賞物拙也賦之卷之と引を考し一詞を載せ
り秋村の能く公評ありしこと知るべし而して
夫子自らも自負する不ある歎錦幕袴の

の神とて末尾の抱負と異る露と云ふ、更思高文
駕巖負仿萬安蔡侯記、銀鉤鐵畫若見許、若
亦放腕作大字」とあるを以つて微くも歎、彼人の
畫も亦書と同しく一家の風格あり畫好中自畫に
對する詩長く多し畫士に得意の鈔授するしき
而して何人か其の心を知る、彼人の畫くことある
と云ふべき、木、新、清、水、を、画、も、め、す、必、く、可、し、も、何、ぞ、又
画、も、怪、ある、是、も、也、彼、の、と、是、臨、中、四、九
州、遍、く、~~其~~、花、勝、り、詩、の、入、る、か、の、又、と、解、し
と云ふべし、其の親家の如御休系をさきとて、

舟船通上四、枕海市塵開、糶糶多心計、廿五靈

出史方(下略)

と歌心、水邊驛有感の詩云々

一往微る、蔬圃向白衣人、逝冷柴園、爪標と其

溪流遠、滿眼夕陽黃葉山

と歌のそ、若等脚を、追憶す、歴る所の名勝待ち

たさうし

秋 秋 却當つて福原へ、備そ、真于在筆、頭菜と略

くんち、あま、今う左、後、しを、おす、後、却、文

言を弄する、の、巧と見えし

福原之地古、穢、瘴、皇、臨、室、春、州、長、於、今

風、雨、蕭、條、寂、鬼、哭、往、陽、白、楊、誰、知、太、平、別

有、象、以、文、治、四、仰、我、皇、怪、式、一、種、筆、頭、菜、

慣、生、斷、鏃、折、戰、後、鋪、甲、事、農、王、相、國、看、別

此、万、應、符、徑、紫、子、東、西、南、北、人、近、向、福、原、儼

一、宅、儒、餐、鎮、對、首、藉、盤、寒、厨、晚、飯、炊、年、麥、

忽、見、小、婢、鼓、筠、籠、殷、勤、言、自、真、于、石、紫、子

啓、此、喜、欲、歎、咬、菜、於、儒、有、因、緣、食、字、何、如

食、筆、便、却、笑、食、字、求、為、仙、吾、是、才、盡、江、文

通、亡、彩、筆、後、文、粗、野、後、來、食、言、人、所、饒、向、爾

敢云知己也。夢中縱得業如緣，其奈茫茫無由
言。歎字智永藏退業，急收我腹百千把
去。近問以平凡字也。
(十月十二日夜記)

秋邨時：倚語と弄す方三四を指す

欲歌

欲歌先見口氤氳，稍撥檀栾已過雲。第四
橋頭明月起，行人多少隔窗紗。
輕櫺漫燃燠，清夜酒暈恰先愛別春每唱
合款相思字，秋波偷泛意中人。

既北詩注載世鬼詩戲撥

蟋蟀聲多微滿，點長梧桐葉。夜月蒼苔泉
北去無多路，未思來後事。霜
枯骨猶存舊日痕，的眸欲遠傷於烟。即身
應似信身冷，不煖鴛衾已一年。

四時古梅也 節二

芙蓉迷曼睩，嬌紅上肌肉。來入滿中，凡即
羨底伏。

遙こ半夜霜，倚疎水中央。芙蓉花漫似繁
無素而復然。

秋村酒と啼鳥と終に酒のあり早世す、染るる詩中

酒家の多きハ怪あり是ハ南時文治(梁の)酒家の多きを(梁)を非難し其の七ありしか(遠)中(有)矣余詩中多酒字者此(梁)の一絶あり(梁)月十三日録(梁)

秋村跋卷改遠書、菱湖と米庵に比し、米庵の菱湖、及心のをも酒●量の有無に帰す、まこと、人の論るる、其友の全文を抄す

菱湖書法道進、得力于河南北海、曰、河米庵以名父之子、書名籍甚、而翁則刻落一言、備者取給、出其所述、法道、河之上、河以筋骨峭快

取勝、翁則及是、故間傷婉弱者亦多、要之凡神超邁、有垂紳擗笏之態、是河所決不能也、故浪翹蘖、日頽乎塵凡、瓦研之間、今如伊丹氏、并凡錄飲中八仙歌、蓋得意筆也、近人有并子美為九仙者、以其可配青蓮也、余亦持指此日十仙、為翁方亦媿美草聖也、豈米庵不善飲然則如是神致亦所決不能得也

水竹曰、豈見者亦有借翹蘖之力者乎、是余筆決所以不及也、河

秋村傳(梁)下獄の事由ハ、為谷者、秋村傳に詳

也曰く

藩元福田氏世居淡州の次革新後其家臣有圖
脱藩籍而獨立者於是藩士激昂糾合同志性
淡洲頗有殺傷朝廷罰其首謀新居兵井大村
純安南堅夫等皆助死秋村被禁錮秋村深傷
回粵之元憤懣不措日夜痛飲遂得病而歿
年四十二

秋村の禁錮名節を因すこと忍ぶべし、秋村の事
四年と云ふ
の余の心よりいふに北藩の事、河下富貴家の淵藪
(十月十三日録)

也、お不得税法、據りて之を取調むる納税者數
の里の約あり、あり、五十萬圓、八十萬圓、八十人、他
郡に無き也

新 越 下

總所得金額八百卅萬圓餘
|| 四名を有する北蒲
五十萬圓以下

| | |
|--------|---------|
| 千五百圓以下 | 七十八人 |
| 千圓以下 | 千三百五十八人 |
| 五百圓以下 | 千二百八十一人 |
| 二百圓以下 | 五百四十三人 |
| 五十圓以下 | 四百七十六人 |
| 十圓以下 | 二百九十六人 |
| 以下 | 九十八人 |

報

| | | |
|-------|------|--------|
| 一 | 萬圓以下 | 七十七人 |
| 一 | 萬圓以下 | 三十九人 |
| 二 | 萬圓以下 | 十八人 |
| 三 | 萬圓以下 | 二十四人 |
| 五 | 萬圓以下 | 十五人 |
| 七 | 萬圓以下 | 六人 |
| 十 | 萬圓以下 | 二人 |
| 二十 | 萬圓以下 | 八人 |
| 五十 | 萬圓以下 | 四人 |
| 總計 | | 四百三十七人 |
| 總所得金額 | | 八百卅萬一千 |
| | | 五百八十六圓 |

右の具體的數字に就て知る如く北
浦原郡は縣下の大部にして且つ以上
に示すが如く富豪人地主を包有し居
るが更に全國有数の米産地にして年
額四十七萬石を産する大縣なること
を知るを得べし

新不得税法の税率十の増徴あり
 左表ハ五第
 旧法を承す
 新法を承す
 大略を
 之を承す
 べし

所得税法力改正サレ税金力左記ノ通低下シマシタ

| 所得金額 | 税率 | 改正後 |
|------------|---------|----------|
| 所得金額八百圓ナレハ | 年税額ハ金四圓 | 金四圓 |
| 千圓ナレハ | 同 | 金六圓 |
| 千五百圓ナレハ | 同 | 金十六圓 |
| 二千圓ナレハ | 同 | 金三十一圓 |
| 三千圓ナレハ | 同 | 金七十一圓 |
| 五千圓ナレハ | 同 | 金百七十一圓 |
| 七千圓ナレハ | 同 | 金三百一圓 |
| 一萬圓ナレハ | 同 | 金五百四十一圓 |
| 一萬五千圓ナレハ | 同 | 金千十六圓 |
| 二萬圓ナレハ | 同 | 金千五百六十六圓 |
| 三萬圓ナレハ | 同 | 金二千八百零六圓 |
| 五萬圓ナレハ | 同 | 金五千八百零六圓 |
| 五萬圓以上ハ | 略シマス | |

十月十四日大池と北野の印を贈る

石印



梅安刀



時代全の印

石印



外根 楊鈕

鉄研家

清元



鉄研 社印



石印

西崎 社印

月徳の印

時代全の印

欽云

嘉永六年冬

欽云

○余の架中未比古刻書跋ありし此書文政年間書架原
柳庵の刊する所を前集より一冊梓し上は格別珍
本と云ふは蓋し其の十二三日の價あり、余の購ひは
書入本より此の方跋を漏れざる者名と目次に加く又誤
謬を訂正するもの二三に止すべし、加筆者の一も確
うに持谷板ありし他の一も未比詳しうあるを
或る西村並又こあるもやと思ひ、此書入あるは
其の價高し不慮多人も架中の珍とすべし
ことあり

(十月十日記)

○今朝書ありし世子の校中麻生正庵と其の書架

附世のものと云ふは流るる著書と五條の拙書とを考
し其の額を掲ぐて詠祝せんば公正の後歎あり由り
其の拙書文のまゝある由利公正の揮毫もこれ係る
ことを知り、更に附のまゝありしと云ふを得たりやと
そのを以てし、更に附のまゝありしと云ふを得たりやと
とある二三枚を得たり其の附のまゝありしと云ふを得たり
況三十年の巻後ありし、これと詢とす、殊とす、其
ものまゝありし、五條拙書又日の拙書を心づくる所
合する之を底とす、其のまゝありし也、世人と云ふ所の、
此家の存することを知り、其のまゝありし也、

遺言に傳ふところ

(十月十日考記)

○伊勢の津改東陽の著し古詩大観と云ふ二冊に
有觸れれ者物心不持しきりし辰法にことごとく無つた
此歌集多きりし如くは備へて見ると、何れも致向心出来て
居る者心ある古詩大観と云ふも物多き古詩と輯
められたるもの多き。世流の運命に關する古樂府古詩
二詩を納めたるものあり。一と孔雀東南飛を絶句と
し漢代のみ史直仲卿と妻劉氏が互の死を
此ことを詠ふ詩と木蘭詩とをある。此二首の各句を
仔細に注脚を施し、すべし此の二詩は關東古末社家

論評考證し得あるものも附刊し此のひある。
一往漢文のや説しむれば説くある、そして此者も何ん
う刊行したることと思ふ。世流が刊してあるものも六
とす。きんあまの女流と東陽の **木蘭** 富田徳
章一と云ふ男の **木蘭** といふ女の **木蘭** である。此の
婦人の別しむる **木蘭** 松本が考いた説のあり、
の事 **木蘭** の事。此女を伊勢の津の豪商の娘の如く
考へてし **木蘭** 考へてし **木蘭** と難し生涯嫁
せり、年三十のころ一家の眷族多き歎し **木蘭**
儀を行ひ家事を為り、**木蘭** の **木蘭** 考へて

授して牙壽を擲り親と上四の性来して高貴を以て
汝の努力十数年の一家を養ふに倍して之を以て
於て一家に隠棲して筆硯に親しみ亦に歸を以
てて家を造るにめりんと其汗流丈夫の交あり
この二古樂府の主人に似る所ありて此方う此
関秀に依りて刊せしむる七六書と謂ふべく此婦人
七六傳ふべきとあるは人常る之を知らざるを
遺傳とす。あらず古詩大観とすの古言を以て一編の
如訓とて見らるるものなり一談具味を以て東陽
り致味の人なりしこと傳の著者なり傳つる古言也

とす。此方も七致味の二書に於て十月十日
の此の秋時：兼し東台の傳るる梅のを以て
梅とす。稀に補を以て人の珍を以て寄る
とす。よきより五に伝観して宋人地。安田長
し他内田貢とて高貴を以て録る。他の同人
和四三浦林坊内。其今、地。ある。一以て取者
五千人祀来存し。此山ありて吾等補を以て同
人の外にありて。其山ありて。清山天臺石井
相考す。其もあり。伝を三百點。在し。持考
り。此の形式の異なる者。其の古言の遺言也。

おのゝ此範圍のよりの著し多うた、自分も寸を
の程の両珠にふらふもの八十點を抜て持表、床の
間と陳列し、余のコレクシヨンをあつ出して八、十
のふんづ初めとある、他人の出来るが故の量と
むあつたのを林と名付た、林を寛文以来の
あつた、**深木の**目録を七陳列し、**名谷**を**表**の
の形式の異つたもの數十點を携帶した、おは
甘のふんづ、**程々の**陳列を不志し、**林と三馬**舊花
のふんづ三個を陳列した、**ふんづ**と十二個あつた
ううく、**表の**表に十二支、うふ書画してあつた、**蓋**

裏に三馬のふんづ、**春英**のふんづあつた、こつ注して
あつた、**三馬**のふんづや**秋味**のふんづがどこうふふめと
扱ふ思ふた、**林**のふんづ、**敬勝**のふんづと**七人の**符を
用の界紙(多く、**相心**と**其の**人の号を刻してあつた)
を二十枚、**ふんづ**集めて一冊の張を心つたこと
む、**此中**より多く得難いものもあつた、**蜀山人**の自
筆を刻して、**ふんづ**のふんづ、**出陣**きん、**ふんづ**
し、**ふんづ**のふんづ、**教**多くあつた、**あの人**のふんづ、**若者**述
ふふ、**あの人**のふんづ、**あの人**のふんづ、**あの人**のふんづ
のふんづ、**若者**述、**あの人**のふんづ、**あの人**のふんづ、**あの人**のふんづ

を以てえんき年分の寛政迄をあらうか、巻尾に
業社迄の日文漢のありことう刻してあるの
を以て一ツ天を洩らして例の凶格の自筆を以
てして是る
が持来し拍の中に入らぬ
自筆をう一卷あり此のふきもの子列蝶綴り
文富の筆報其他の彩色を以て古い此のふ
ぬりもぬりのふきもの江戸地を以て来た時の
記や什と稱しといふは、漆山天香の出るの内
うち、其一の天保四年の日記う一冊あり此の
日を画七千うおうあり、其書の由、樂家の

か、其のあり花月軒紙の版を七あり此のふき
平政のあり新の印あり、和田う、其書一、其
京、其書一、其書のあり、其のふき、其のふき、其
形の幅をえん、其のふき、其のふき、其のふき、其
の記、其の記、其の記、其の記、其の記、其の記、其
天和の刻をい、其のふき、其のふき、其のふき、其
うあり、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其
三村出るの内、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其
見、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其
や、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其のふき、其

十種もの出出した表紙の元々美しき免えにその
を特々表紙用ゝ彫り出した相乗一散々一の金襴
を用ひ比喩のひ、中央よりあせり不しと云ふ者も
この金糸は彫出してあつて、内定をその子列
蝶織りの公卿者なり。葉の房先のちりり
一冊の縁入の公卿紙を刊行ししことりや入して七居
り。誰れか出るの内々其の室物は一冊出た
つ比喩りしに流るる記するの如く又せし
て二枚や三枚を埋め、~~ある~~ことり行見
この事ゆゑと田換の事ありある。ユニニヤノ本や

流るる行々の者子の終り表紙を多く集め、
其林々も巻末にありありと出せば、
そつと曰うおんび一記脱しその後、
此一斑を記する止す。 十月十七日記

此の神田の神境内なる角田林冷句碑の陰
幕式あり、招うんを子供も能く前の
つエノロサの建碑の式を美術家城内
行ひし時、美しき又あり、
文七梅川の宮にあり、余は、
宮を（一）を以てす、
位の碑又と一後す

ることとむらう。

此の公簿に於て其谷と申すのは法と文あり、其谷
と申すは西郷の事と記してあるもの標を
考へて見ると出所するところを余も
考へて見ると此の公簿に於て其谷の事
所記の標は西郷の事と記してあるもの
三十ある由二十餘元と記してあるもの
標をのりて自力取つて置くこと
業のこの荒干あるもの一
と云ふ方の者悉く此國を
十

に深代物法より換骨に
てみれば

此の公簿に於て西郷の事と記してあるもの標を
考へて見ると出所するところを余も
考へて見ると此の公簿に於て其谷の事
所記の標は西郷の事と記してあるもの
三十ある由二十餘元と記してあるもの
標をのりて自力取つて置くこと
業のこの荒干あるもの一
と云ふ方の者悉く此國を

又法明系に西郷の遺印を考へて見ると
前回の公簿と併せて考へて見ると
標をのりて自力取つて置くこと
業のこの荒干あるもの一
と云ふ方の者悉く此國を

し去らざるを恐る、名家の以る之れを保存克と

此方檀印

銅印

自刻石章

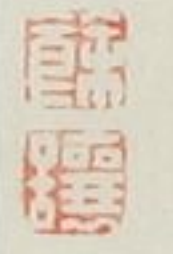


芳檀方印

以下皆石刻石氏と款



しつもの多し



既すうまをす、大河城野を安養雲の人、必を元
清と云ふるを子孫と云ふこと、刻文の如し、
浦のうまを前、るけり、十月十日録

〇雨宮を柳と推する、折柄書畫を推す、
高人あり、是れは、秋翁の如し、為歎
嗚呼、うまの七の、懐かしの、折柄也

其の西平ゆえ

亞米の如く推す

神風録

たうら七のうま

さわらびくさ

せり

何となく昨夜の時勢を記すは
二程の風味あり

○来月北巻の老由忌に
要を登まんと末の女子を伴ひ十八日
小浜内三泊舟具一泊井方
ハ井方五十日と云ふ
すをうけし舟具の又日行し
の帰省と近年の例也
北問多の風味無き

十
（印）

此あぢが日誌に
新内と清和の
の毛糸の
出荒平あり
復ねあり
原はあり
のち
獨樂
ろし
あ

画一なるく、一幅の画、横より、うめ、梅、
白鳥の心、野のうめ、彼らの、鳥、故の、性、物、を、
へき、歎、後、歎、有、の、園、の、沖、に、と、り、外、に、柏、如、
身、の、屏、風、に、柏、如、と、名、を、こ、い、ふ、と、三、輪、に、
大、の、家、を、あ、し、し、と、い、ふ、を、縦、線、を、十、二、條、横、に、
し、る、獨、本、を、去、原、洞、二十、首、を、録、し、快、亭、の、
書、に、應、ず、う、し、の、題、後、を、快、亭、と、三、輪、の、
代、也、内、に、彩、も、う、と、行、々、の、花、弁、を、描、き、
所謂、繪、も、其、也、お、も、し、う、し、を、免、る、念、指、動、を、
う、の、年、峰、の、四、重、耕、場、の、通、し、十、二、枚、大、屏、

凡、こ、の、年、年、の、年、の、年、と、い、ふ、は、
凡、也、五、年、一、詩、と、い、ふ、は、
美、雪、を、壽、之、女、と、い、ふ、は、
山

名園松竹、瓦、祥、烟、弟、姓、復、主、誕、辰、
是、廿、一、阮、倪、今、七、十、朱、顔、里、松、竹、
仙、洪、範、五、福、壽、為、主、况、重、富、原、夫、
其、婦、鼓、瑟、鼓、琴、和、樂、湛、甘、鐫、術、
吉、且、有、我、祝、朱、陳、自、成、村、
麻、繁、君、家、化、及、園、々、倡、隨、長、全、風、教、

敷

久須美の石村小島谷一村の姓朱藤自成村と云
の事これらも也五峯中々里野の事今を言
ふ為の事朱藤里野とつらぬる事可なりと
云きし事氣一し居り

偶々高田平津池の事今先ら成
こり久須美の賢道に伝ふ事と久須美の祖
先の事を説く

曾我十郎祐成の事此國上善次と云ふ事あり
傳と云ふ事あり因にあり日伊夜産の事あり

國上の某寺に在り時曾我兄弟後継の事あり
善次之れを聴き遂に同じく連坐罪を獲んこと
を豫めしと自裁す事ん事此を祐成の妻
姪身の身と云ふ事脱して善次に據るとい
ふ事此の事あり事ん事夫人既亡し其妻向
かき分曉一子を産けり事の事ん事曾我
の祖と云

と云ふ事初めは事ん事久須美の定後の事
我氏の定後と同一事なり事ん事此の事あり
是の事上然る事ん事を産げ其の事ん事此の事あり

曾我元才の落首を歎し、終に雪舟の書多
幸を祝し一坐して泣くもの多しと云ふ、校友の此
の清夜を惜みきくことの嗜に好演説と稱す
新田洋在の目録あり各種の友人を記し或人と
錫茶屋に留連、旅館開印の態也、酒を嗜むの
余に此等うけんは新田も今も無味也、然るも日
しく繁茂酒腸割に久しく存るに止まら
能はざる此故也

上野黙狂伊藤退庵の勤王事蹟を編し、余に歎
字を作らんことをもとむ、余其の病に感してゆ平

業と走りし日、其の且つ伊藤の心むに於ける
飯味の先輩半きと説き、種々のあつたを懐く皆
ら上野の知らざるものなり、又伊藤の家にはありし是れ
伊藤の遺説と云ふものなり、黙狂為る其係を補へ
とす、黙狂の偏家なる係守る退庵の日記の
所あり、天冠遺説の日記と云ふ、舟村信り多し
中業く伊藤と云ふ中、車中翻讀す、この書退庵
信信好判り、奥平御人の部あり、其の時承
久希の天冠を京都へ渡す、其時の日録を
この二年の二月あり、川原田をたふし北

國通を經て三月十日入京し、略々北宮十室を
費し、同行の役人の皆御膳の入りと西河八雲、後下
詢と云ふ大矢透、亦幸心と伊原退翁より出馬
の洛奥平治の侍を賜へし行をさうとあり、又
天冠の外に金銀の地金を入る箱十二あることを
記す、或は玉冠を托し此の金銀を^{帝の御衣}藏之の御府
に供給せんとす特に退翁をも考へしものなり、日記
中の左の文方の言あり、^注此の地ノ状況と
推すを得し

今般順徳帝玉冠之義は、朝廷御建言

之方有るに玉冠有り

寂然が目只今此意、戴行は然らば玉冠
之故を以て後述に士人禮を左右に及ぼさず不
能此義で扱ひ、皮露し程、頼有し、禮之

乙三月二日

依波好

伊原退翁

西河八雲

壬生原

御報の中

道中皇親の地を皇親皇親御屋に預け保る

とハ冊ヲ採シ、北堂を自志の記念日とシ、丹美ニ贈
ル

丹美ニ有する日丹美を三と説す、
中々先河内河内中嶋の祭典(三十三回忌)の
物類を記し、
此こそ今乃築地の舊也、
醫書業を中居に答をなす、
世に之を種を^ハの^ハを^ハと説く、余も^ハ米倉
の^ハ紀^ハ也^ハ才^ハし^ハ互^ハと^ハあ^ハと^ハ説^ハ族^ハる^ハや^ハと^ハ河^ハの、
世に三回^ハ初^ハ族^ハる^ハ才^ハし^ハ互^ハと^ハ下^ハの^ハ嘉^ハ年

次ハ七米倉の^ハ人^ハと^ハ路^ハの^ハ門^ハを^ハう^ハあ^ハ言^ハつ
と^ハあ^ハの^ハを^ハと^ハ人^ハと^ハを^ハ余^ハ二^ハ人^ハ
と^ハあ^ハつ^ハと^ハ説^ハん^ハや^ハと^ハ説^ハす、先^ハ河^ハの^ハ名^ハを^ハ河^ハ内
也^ハ、世に三^ハ先^ハ河^ハの^ハ名^ハを^ハ河^ハ内^ハと^ハ説^ハく^ハる^ハや^ハと^ハ
依^ハ頼^ハす

世に三^ハ東^ハ東^ハの^ハ物^ハを^ハ書^ハす、其^ハ返^ハに
目^ハ宅^ハの^ハ柿^ハと^ハ也^ハ、
余^ハと^ハ余^ハの^ハ印^ハの^ハ以^ハ既^ハ知^ハの^ハ也^ハ、
家^ハ族^ハと^ハ也^ハ、世に三^ハの^ハ也^ハ、
家^ハ族^ハと^ハ也^ハ、世に三^ハの^ハ也^ハ、

其後、**樹** 契するも秋季の樂と一掃を今
有健在と見え、特種北柿、**傳内**と名の**附** 瘧
他々、**與**に所の特種のわづらそ風味あるに自也。
何となく往時の徳心心地に似た料理、
東京もむねのきかず、種を名前の在に下し
見人の指を裁培と試みんと欲す、云えん
必其味の一端と謂ふべき歎

丹吾之と共中茶を費しと新農田に於て汽車中
車窓より雨巾の象山を望みと其感と云ふ傷に
車中一室より丹吾と語り、こゝ前夜丹吾にあり

中茶にニンと云ふものさう、体質を考へるは多む
かの井ノ木あり政友派に属し、且つ社会主義をかい
り、愚民の煽動を市とす、車中丹吾にむく、**茶**
茶 云々する不多く、地主横暴論より、余黙して敢
て言はず、赤川村の**田** 小作人を云々するは、進ひ余如
めし口をなぐ、

赤川、**西** 茶の蒲村を今、**往時** 北村の**茶**、**茶**
●の特徴、子供等と同じ、**寺** 子屋、**道**
さう、**茶** ことあり、北村の子供等、**探** 探、**茶**
西茶を心の子供と聞か、**赤** 村者、**茶**、**茶**

物しや、赤川軍と西軍を以て、**西懼**と云ふ
し、併し其懼俾らざるは美の望を云ふに如也
赤川村に在る赤の字あり、傳ゆらざる毒化の
因縁あり、**今**し申す、余の幼時、**非**改に
赤夜のみん、如く乱暴を爲し、今又松之之
を煽動せば、**赤東限**、**難**危なる毒化、**此**
地村まん必然と云ふと、此の一文を睥睨し
日改所を一掃せん、余の山岳と指し、**此**
の好風を充て、**充**て一掃の青緑山あり、**誰**
に此の山形を傳ひし、**の**ち、**今**も毒化の

と云ふ、忍ぶもの、**若**し、**一**傳ひ此を毒化
する日、**今**は、**今**の家山に、**此**の山を欲せず
且卿の宣侍を余所を好む、**と**を為さん
但し、**権**利の宣侍、**と**伴ふ責任の宣侍、**無**可
し、**而**して、**順**序に宣侍、**後**を云ふ、**し**
無智蒙昧の者、**漫**らば、**権**利思想を故、**吹**
し、**責**任は、**彼**等の、**頭**腦に、**甚**し、**稀**薄なり、**し**
責任を教へ、**し**ることあり、**は**、**言**ふ、**有**、**責**任、**を**
の宣侍なり、**と**

此男余の説を聴き、**希**むらう、**必**ず、**責**任論を

先ずさくしと挨拶をうけとて換とて新米の回の下
 車す下城の山も最早色濃思おつく萌しつ
 つあり地主側^{大抵}の意見戒を要するも、彼等も多
 く今高困憐状態あり、新米は地味の日
 大改りあり新米を脱しんたの記あり、其
 の言の如く異なるも、
 ①を欲するも一也、没
 リヤ心人も煽動する
 の結果、遂にやむこと
 をうきとふんこと

毎 日 新 聞

大立札を押立て、
 排日反対運動

(桑港特電 十九日發)

書かれた文句は極めて皮肉
 ロサンゼルスでは目下排日反対の運動が起つて居る其の如きは十八間もある大きな立札を掲ぐ之を六十箇所に立てたが其の文句が又奇抜なもので「加州の野を青い色にして置きた
 いそれには日本人に土地を貸せ」か「排日案には
 反対投票をせよ」「公平にせよ」「日本人に土地を貸せ」「君等に安
 物を賣る日本人を排斥するは何事だ」「日本人を追い出せば君等の
 家族は自分で百姓をするか夫が嫌なら反対投票をせよ」この類であ
 るがフイーラン氏が「加州を白にして置け」と言つた言葉
 に對し「加州を青くして置け」とは一寸皮肉た而も文字は赤、青、黒の
 三色で書かれて居る

この念ふ加州の排日反対ありと憂と同ふすも不也

(以上十月廿六日記)

同行の娘を真つ家へ考す、此等に取らる
 考すると、我が身の日中、大なり、のハリワード大なる



のがウソを着る、
 描影を、
 こ

○今次の帰省を候し
 つし、お尋ね下さい、下条若
 原神社境内にある金

刀比羅神社移転修築の経緯を若干年を考附
し此寺に鈴木守雅：文付し此の昆比羅神社
ハ百年前福前余の家に移し建設し此の昆比羅神社
のものより遠く築き置て暫くしよのちありて
類焼を以て此の境内が先年焼を
布設の時、或許森松を多け再来其儘に打
捨ありしを近年より救心地を以て其地を
回し境内より昆比羅社の用位地を奪ひ此
のいものあら用を要する所を吾先代の
経緯に傳るものありしを、黙視し出来ず、

嗣子の名義で若干の寄附を以てのちありて、此の
の時日の足らざる為め其地を奪ふことの出来ざる
を以て遺憾とする

斯る神社を吾家の建設し以て神を祀りて吾家の
當祖又時代の船舶回漕を考りてことある
より金比羅を崇拝し此ののちありて、此の
言ふ不に伝ふ、此原の八幡社に較べんか、此の
神社より多弱かあると云ふの、隣町に佐抗せ
んと、一社を建てたるがと云ふの、高市原一途樂
と云見るべきこと

心ヲ物有ら秋季にやよひ時節ハ
麩にあり種々の果物あり紅毛の
今が酒のち物と舌を後ハ肉と
麩印とてあるハ、無花果や梨菓や、都下
の味は、平まある口とぬら、
あつと流るにうまひ
(ゆめあり)

○十月廿六日 午後一時より大隈邸に月一令を
くま例の如く候も三時、流り遠境迄を聴
す、侯の笑話の内、捧腹の事あり一二と
先奉御印位の時、侯と^四位格が昇殿と許

され伊原侯と五位格が昇殿し出来ぬの事、衣冠
も差違あり、先侯と皇の替束有らん伊原侯と
赤毛の如くは、伊原とどうしを式に出すの事
といふのが、カンバツトとある、大隈^四令の時、
未ゆらし衣冠束帯して中へ出仕、及ぶと
冬の寒氣は、先侯の時、寒き凌ぎよ、衣冠の
俵火鉢に踏いて暖をえよといつし、冠の
紐う火中、蕪の下つて焼けたの、閉ルンヤウ
ト一時写し合ひ、の修繕をせよといふ
維新の候、トンを衣冠と着けん居ると

うと聞のを、倭の七身と好ん比むるのか、ぬる衣
服と云ふし比むる比、黄ハ丈の衣類を有し
思ひ切つて去尺の羽織を着たと云ひる、

北國時分、將軍の召料む及物の供、ちうと居
の綾子の葵重、う紋の着いたものを或及も
をり、またわたものすあつた、商人の用、またぬむの
いあつ、う、備うあ、品、の、此考、上、等、ひ、あ、
まの、あ、う、う、が、後、も、お、飲、の、服、を、馬、麻、大、き、
い、ざ、ん、と、小、い、さ、う、つ、た、自、分、を、之、ん、を、仕、ま、
帯、用、と、し、た、あ、う、し、失、敗、し、た、の、を、里、天、
十

俄の羽織を、こぞと作つて着て見せ、こ
んをぬるも、着、悪、く、い、ち、の、ひ、あ、つ、た、と、天、八、
英彦山(善通彦山と云ふ)に、就て一、天、流、を、後、
出、た、と、北、山、を、修、験、道、の、法、印、う、居、つ、て、こ、ん、
皇族ひあつ、何、所、の、佐、賀、の、藩、主、と、之、ん、を、其、藩、
主、の、こ、と、の、存、心、う、つ、た、其、主、の、善、治、う、多、生、流、あ、つ、
ら、皆、ま、善、治、主、の、受、持、ひ、あ、つ、た、十、二、テ、七、は、善、治、
是、代、う、何、う、が、助、け、ん、た、こ、と、う、あ、つ、た、と、
ま、あ、つ、た、縁、因、う、あ、つ、た、ひ、あ、つ、た、此、の、山、伏、ハ、年、々、お
札、を、佐、賀、市、中、に、配、つ、た、こ、ん、う、強、迫、的、の、女、が、

一錢も元^{ちと}手^てのこころぬかのを五^し美^い信^んと長^ち子^こ類^るを
 ものこころ、収入^いが^らり^く多^くうら^は、あ^らう^らん^は休
 咎^たか^らのおれ^の這^い入^りぬ^らぬ^らの^一軒^{けん}あ^らう^らん^はを
 吾^{われ}家^の家^のわ^の此^のれ^を持^もつ^てあ^らう^らと^家僕^がが^棒
 を以^もつ^て撲^むり^つけ^てつ^めと^放逐^しす^る、何^のあ^らう^と
 予^{われ}と^此の^彦山^の時^平を^親と^する^は坊^の主^の居^る
 自家^の家^のを^若公^の後^にい^は時^平と^時の^家の^怨
 此^のあ^らう^ら所^のい^は、こ^のを^抱抱^して^もの^れと^云つ^つ
 侯^も賦^のの^向に^當り^て租^税を^徴収^し比^のい^は、^三ん^り重^し
 歛^れと^云ふ^は、奸^臣賊^子呼^ばり^をて^えん^れと^向こ^う云^ふ
 十^の十^の

此^の其^の向^のの^満息^のこ^のも^たら^ぬ後^に

維^新の^高の^四家^のの^維新^の何^をも^大切^なと^のを^統一^的
 租^税を^徴収^しこ^のい^はあ^らう^ら比^のい^は、租^税を^輕く^する^をい^はを
 以^つて^仁政^の心^得と^居る^は舊^思忠^の連^中と^云ふ^は、こ^のい^は
 比^のい^はう^らう^らに[、]里^田を^いは^は世^の海^を長^友と^いは^中
 央^の府^をい^はと^税を^徴収^しこ^のい^は大^不服^で、自^分を^大
 反^抗を^やり^前原^の誠^のめ^きを^檀才^とい^は比^のい^は後^の
 租^率を^変更^して^統一^的政^治を^亂つ^て比^のい^はあ^らう^らの^強
 正^典を^守り^ても^世の^人う^らう^らに^いは^は前^原の^自
 分^を強^制する^を向^こう^受け^て自^分を^強制^し比^の

島津久光も木戸や自分をも奸臣呼ぶは
りとして澄下、上妻もこれ、ナンテも税を取らん
乱臣賊子と呼んだものだ、自分を強正甘藷の
後人を面前に尊して國家と租税を論じて此妻
はこれとある、前原の志、怒す可からん
罷免を論じたころ、内各、仲裁あるもあ
つて一比心も後、冬、減と一比、里田の如き洋の
しと西洋く出さうけてえと、利の害の四々の租税
の取方、方、秋、華のき、口と、同、抄、ひ、あ、う、且、つ
國家の経をもと、租税、待、つ、七、つ、心、あ、る、こ、と、り、初

を別つる、帰朝、内各、出、身、し、て、自、分、に
對し、禮、を、厚、し、て、先、非、を、謝、し、此、こ、と、も、あ、つ、た
と、説、く、る、後、又、回、く

自分の薩長のおき、雄藩出身の政況家の間
に、存在し、ま、う、く、お、ま、の、者、生、な、る、自、分、に、對、し、禮
困、つ、た、係、し、薩、長、も、冬、を、内、輪、う、割、ん、て、居、て
時、に、喧、嘩、を、し、此、の、お、自、分、を、ま、し、其、間、に
働、く、の、地、を、得、た

と云ふ、横井平四郎（ハ楠）のま、し、冬、も、所、う、あ、つ、た、と
ま、ん、こ、ま、ん、と、して

阿んも一以て之を同僚とあるは、自分とてしを逸之
去てあるは、ナニダカ自分の氣に於てぬ男ひある
此が、どうぞよもの、自分の境より常々交わ
七給、うらた時を賢成を志し、此こととある
れ

と後々

○や田村桂香とて依て木士遷(粟太栗里と云ふ)
の米取山お大物を精ひ、こんと今田村名の節
桂香親族と托さん余擧常のとも也、士遷と此卷
中引取も録をしことと大橋内尾のつ入る心

至福田村と高橋烟波と書き與つたもの也、烟波
と油屋親望の多の以て維新の志勤王を以て
名あるもの、士遷と此人を同意也、此山お陽水
墨淋漓は江戸の風流を、粟里の名は、古に大い
る著るべしと書き、其人お飯柄性行村山と牧と
伯仲の間とあり、唯此人お梅に位、
と上物の人ともあり、お梅に、多くおんさる、余
前の中畫冊を得て其の授柄、服す、今此の画物を
得て更々其の手腕を、目今得し得る、此才女
西園係の書画を集めつ、あるお梅、此畫を得

乃を古くおとす

十月廿五日記

此画協二一律と題す、此畫中別項に鑑しある
を以て重出せしむ

○この臨桂書前大茶碗味あり、其茶碗を山家拜
す、おの首飾を畫し、其枕を京うし、まう、幼の
ニ睡臥せ、おの首飾の考、向を録せしむと、輕きん
即時其囀と、及す、此考、向を、まう、茶碗の、まう、率
の風格を、後、このと、見、まう、き、鄭、其、考、た、の、を
杜秀、次、次、の、母、名、莊、の、の、名、道、ハ、シ、ゲ、ル、と、後
み、ん、と、シ、ゲ、キ、と、誤、ま、し、と、う、海、原、自、由、の

隱者多し人持り、其世と不慮、
物あしかり、命あまら

奈と賣り、其代、其、只、今、の、後

老来、其、を、と、考、まう、の、の、程、計、

其人、其、蹟、を、お、まう、と、幸、と、成、拙

等、と、不、顧、まう、物、と、まう、こ、り

榮、子、や、ま、あ、採、果、人、の、産、二、并、何

様、結構、まう、茶、碗、を、まう、と、お、ん、が、い

休、二、年、一、は、た、南、米、種、まう、の、い

休、二、年、一、は、た、南、米、種、まう、の、い

會社 日 比 谷 商 店

各々付... 味... 人... 撰... 浪... 多... 之... 取... 抵...
大正 一 月 拾 日
電信(七) 電話(七二) 四四六九 東京三〇五五

市

斐丹

号之性保

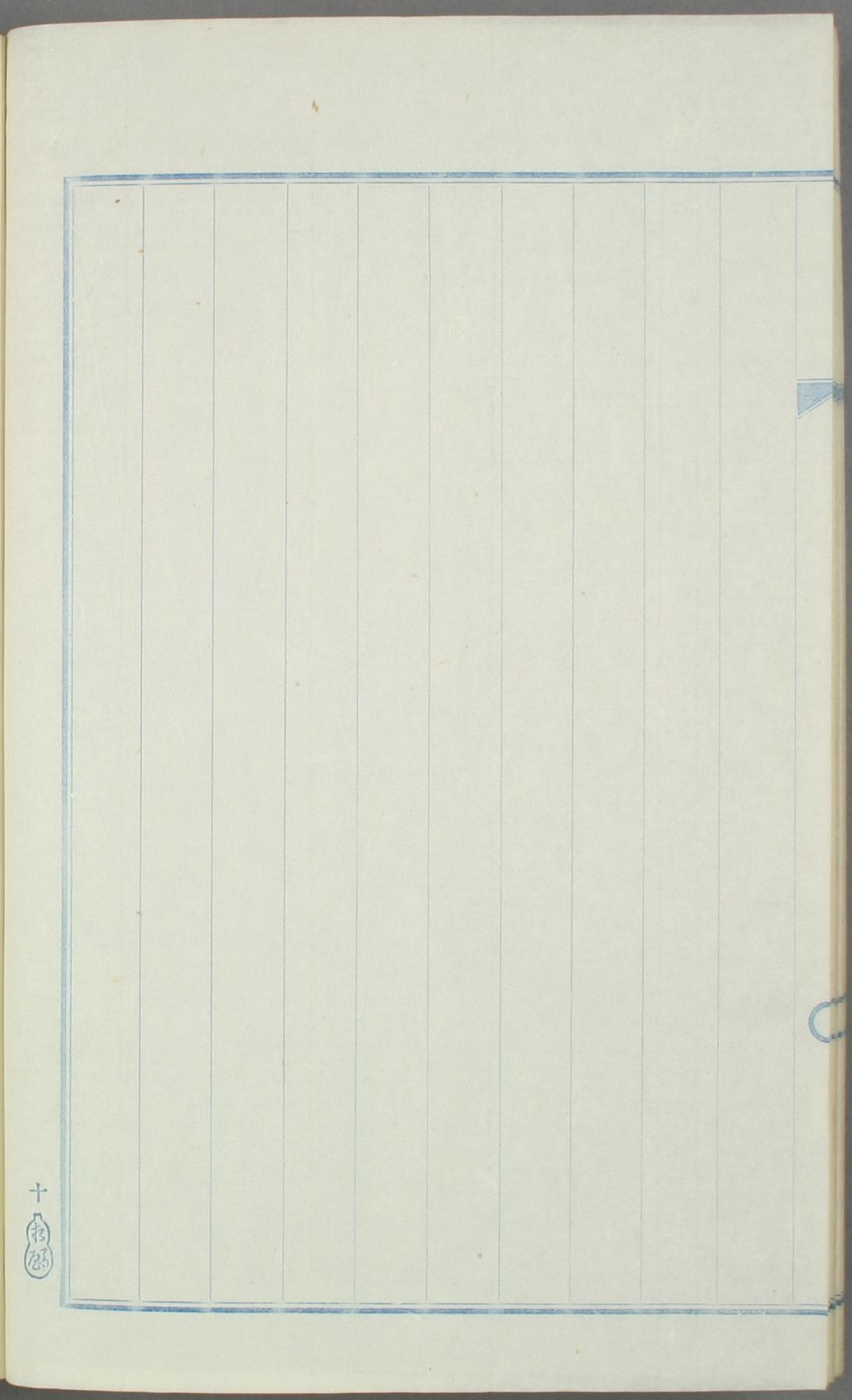
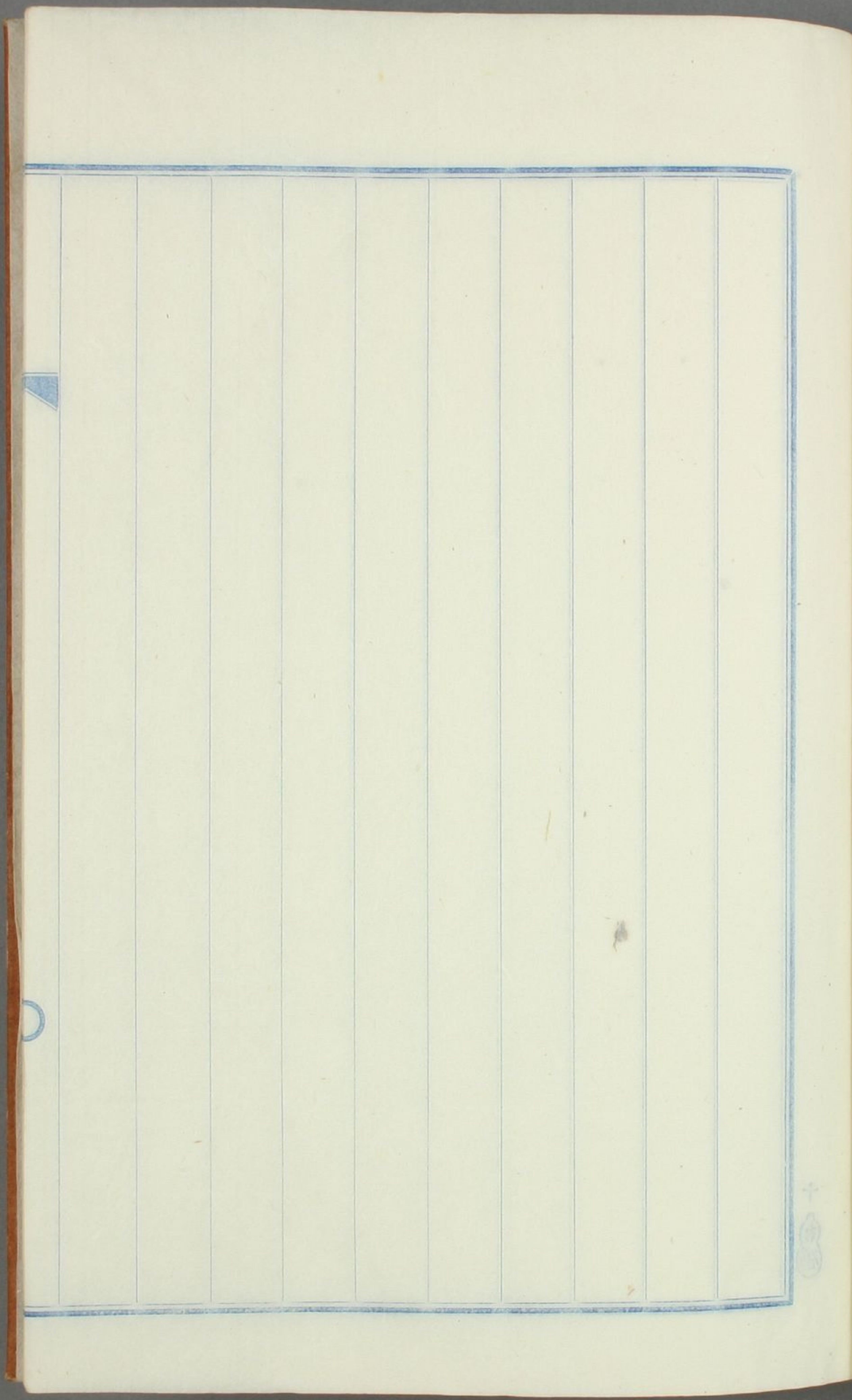
安田是誰... 京師人... 初... 對馬...
 生平... 好... 喜... 寂... 後...
 天... 桂州... 和... 尚... 徒... 窮... 樂... 法... 風... 流...
 友... 善... 善... 容... 柏... 宗... 守... 樂...

和歌の爲歎... 後名... 志...

の坊間にしきしきとまうとらふ二冊を得
たり。珍しくもききよ也。細井平沙の松崎紀行を
傳ふまゝ古本の倭文より和語古多々を
しあり、平沙の四文に送詣あること之を
依り初見を以ることを得たり。此書は天保二年
其の親族より上校同様に領りたること此書
の序よりあり、而して今より得たるものと昔平沙の年
孫紀念に配りたるものと舊版を同排印したる者と
見えたり。平沙の倭文と多々傳りたる和文
の刻々たるを以てあるとせざるなり。而してこれ

前後其長を以て上様と見えたり
たり。随つて海布衣に稀也。今得たる
ハ唐紙を以て、整齊に注あり、板も見えたり。
月林書記)

以下清史録：つゝ



以下全て

白紙

